

青鬼の禪を洗う女

坂口安吾

匂いって何だろう？

私は近頃人の話をきいていても、言葉を鼻で嗅ぐようになった。ああ、そんな匂いかと思う。それだけなのだ。つまり頭でききとめて考えるとということがなくなっただの

だから、匂いというのは、頭がカラッポだということなんだろう。

私は近頃死んだ母が生き返ってきたので恐縮している。私がだんだん母に似てきたのだ。あ、また私は母を発見するたびにすくんでしまう。

私の母は戦争の時に焼けて死んだ。私たちは元々どうせバラバラの人間なんだから、逃げる時だつ

ていつのまにやらバラバラになる
のは自然で、私はもう母と一緒に
ないということに気がついたとき
も、はぐれたとも、母はどっちへ
逃げたろうとも考えず、ああ、そ
うかとも思わなかった。つまり、
母がいないなという当然さを意識
しただけにすぎない。私は元々一
人ぽっちだったのだ。

私は上野公園へ逃げて助かった

が、二日目だかに人がたくさん死んでるといふ隅田公園へ行ってみたら、母の死骸にぶつかってしまっ
た。全然焼けていないのだ。腕を
曲げて、拳を握って、お乳のこ
ろへ二本並べて、体操の形みたい
にすくませてもうダメだというよ
うに眉根を寄せて目をとじている。
生きてた時より顔色が白くなって、
おかげで善人になりましたという

ような顔だった。

気の弱いくせに夥しくチャツカリしていて執念深い女なのだから、焼けて死ぬなら仕方がないけど、窒息なんて、嘘のようで、なんだか気味が悪くて仕方がなかった。あの時から、なんとなく騙されているような気がしていたので、近頃母を発見するたびに、あの時の薄気味悪さを思いだす。

私が徴用された時の母の慌て方はなかった。男と女が一緒に働くなどというところ、すぐもうお腹がふくらむものだというように母は考えているからである。母は私をオメカケにしたがっていた。それには処女というものが高価な売物になることを信じていたので、母は私を品物のように大事にした。実際、母は私を愛した。私がちよっ

と食欲がなくても大騒ぎで、洋食屋だの鮎屋からおいしそうな食物をとりよせてくる。病気になるとお口オロして戸惑うほど心痛する。私に美しい着物をきせるために艱難辛苦を意とせぬ代り、私の外出がちよつと長過ぎても、誰とどこで何をしたか、根掘り葉掘り訊問する。知らない男からラブレターを投げこまれたりして、私がそれ

を母に見せると、まるで私が現に恋でもしているように血相を変えてしまつて、それからようやく落着きを取りもどして、男の恐しさ、甘言手管の種々相について説明する。その真剣さといつたらない。

私はしかし母を愛していなかつた。品物として愛されるのは迷惑千万なものである。人々は私が母に可愛がられて幸福だというけれ

ども、私は幸福だと思ったことは
なかった。

私の母は見栄坊だから、私の弟
が航空兵を志願したとき、内心は
とめたくて仕方がなくせに賛成
した。知人や近隣に吹聴する方が
もっと心にならなっていたからであ
る。夜更けに私がもう眠ったもの
だと心得て起き上って神棚を伏し
拝んで、雪夫や、かんにんしてお

くれなどとさめざめと泣いたりしているくせに、翌日の昼はゴムマリがはずむような勢いでどこかのオバさんたちにせがれ倅の凜々りりしさを吹聴して、あることないこと喋りまくっているのである。

私は徴用を受けたとき、うんざり悲観したけれども、母が私以上に慌てふためくので、馬鹿馬鹿しくて、母の気持が厭らしくて仕方

がなかった。

私は遊ぶことが好きで、貧乏が
きらいであった。これだけは母と
私は同じ思想であった。母自身が
オメカケであるが、旦那の外にも
男が二、三人おり、役者だの、何
かのお師匠さんなどと遊ぶことも
あるようだった。私にすすめてお
金持の、気分の鷹揚な、そしてな
るべく年寄のオメカケがよかろう

という。お前のようなゼイタクな遊び好きは窮屈な女房などになれないよというのだが、たつて女房になりたけりゃ、華族の長男か、千万円以上の財産家の長男の奥方になれという。特に長男でなければならぬというのである。名誉がお金か、どっちか自由にならなけりゃ、窮屈な女房づとめの意味がないというのだ。浮草稼業の政治

家だの芸術家はいくら有名でもいつ没落するかも知れないし貧乏で浮気性で高慢で手に負えないシロモノだという。会社員などは軽蔑しきっており、要するに私がお金のない青年と恋をするのが母の最大の心痛事であり恐怖であつた。

私は女学校の四年の時に同級生で大きな問屋の娘の登美子さんに誘われてゴルフをやりはじめた。

ちよつと映画を見てきても渋い顔を
にする母が私の願いを許したのは、
ゴルフとは華族とか大金満家とか、
特権階級というものの遊びで貧乏
人の寄りつけないものだと言人の話
にきいて知っていたからで、だか
ら高価なゴルフ用具もまったく驚
く顔色もなく買ってくれた。

独身の若者には華族であろうと
大金満家の御曹子であろうと挨拶

されてもソツポを向くこと、話し
かけられてもフンとも返事をしな
いこと、その一日の出来事を報告
して母の指示を仰ぐこと、細々と
訓示を受けたが、実は御年配の大
金満家が大華族に見染められれば
いいという魂胆で、女学生だけ二
人づれでゴルフに行くなんて破天
荒の異常事だということなどは気
がつかないのだ。ガツチリ屋のく

せに無智そのものの世間知らずであつた。

あいにくなことに御年配の華族や大金満家には御近づきの光栄を得ず、三木昇という映画俳優と友達になつた。美貌を鼻にかけるだけが能で、美貌が身上だと思つており、芸術についての心構えが根底に失われている。ギターが自慢で、不遇なギター弾きの深刻な悲

恋か何か演じれば巧技忽ち一世を
風靡して時代の寵児となるのだけ
れども、それが分りすぎるから同
僚の嫉みに妨げられて実現できな
いのだという。ギターをきかせる
から遊びにこいとしつつこくいうの
で二人そろって行ってみたが、話
の外の素人芸で、当人だけが聴き
ほれて勝手なところで引っぱった
り延ばしたりふるわせたり、セン

スが全然ないばかりか、悪趣味のオマケがあるだけだった。

三木は私を口説いたが拒絶したので、登美子さんを口説いてこれも拒絶された。私は黙っていたので、登美子さんは自分だけだと思っ

て自慢顔に打開けたが、私は三木の薄ッペラなのが阿呆らしくなっていた折だから、その後は交際はやめてしまった。まもなくゴルフ

の出来ないような時世になって、
やがて女学校を卒業したが、登美
子さんは拒絶しながら、しかし内々
得意になってその後も交際をつづ
けていた。そして私が登美子さん
に誘われてももう三木と遊ばなく
なったのを、嫉妬のせいだとうぬ
ぼれていたが、私も三木に口説か
れたことがあつたわ、たぶんあな
たよりも先に、といつてもそれも

嫉妬のせいだと思い、三木に訊いたけどそんなこと大嘘だといったわよといつて、鼻をひくひくさせていた。それ以来は一そう得意で、三木の実演だ、研究会だ、というような切符を昔は十枚三十枚ぐらい買ってやっていたのを、百枚二百枚三百枚、五百枚ぐらい買うようになった。パトロン又気取りで、時計や洋服を買ってやつたり、指

環を交換しあったり、お金もやつたりしていたようだが、温泉だの待合へ泊るようになり、しかし処女はまもっているのだと得意であった。そういう時には私に連絡して私の家へ泊ったように手配しておく。それを私達はアリバイとよんでいたが、私もしかし登美子さんに私のアリバイをたのむことにしていた。

私は登美子さんにアリバイをたのんだけれども、誰とどこで何をしたということは一切語らなかつた。登美子さんは根掘り葉掘り訊問する癖があつたが、私は、なんでもないのよ、とか、別にいいことじゃないのよ、などと取りあわないから、性本来陰険そのものだから、秘密癖で腹黒いとか、あなたは純情なんて何もなくてただ浮

気づぽいから公明正大に人前にいっ
たり振舞ったりできないのでしょ
う、ときめつける。

私はしかしそんなことは人には
何もいいたくないのだ。つまらな
いのだ、恋愛なんて。ただそれだ
け。

登美子さんは女学校を卒業する
と、かねてあこがれの職業婦人で、
事務員になつたが、堅苦しくて窮

屈なので、百貨店の売子になった。私は別に働きたくはなかったけれども、母と一緒に家にいるのが厭なので、勤めに出たくて仕方がなかった。しかし許すどころの段ではなく、そんなことをいいだすと、そろそろ虫がつきだしたとますます監視嚴重に閉じこめられるばかり、そのうえ母は焦って、さる土木建築の親分のオメカケにしよう

とした。この親分は一方ではさる
歓楽地帯を縄張りにした親分でも
あり、斬ったはったの世界では名
の知れた大親分だということだが、
もう隠居前で六十を一つか二つ越
していた。

私は賑やかなことが好きな夕チ
だから、喧嘩の見物も嫌いではな
かったけれども、根が至って気の
きかない、スローモーション、全

然モーローたる立居振舞トシマそのものの性質で、敏活また齒ぎれのよい仁義の世界では全然モーシヨンが合わないのだもの、話にならない。私は別にオメカケが厭だとは思っていないが、自由を束縛されることが厭なので、豊かな生活をさせてくれて一定の義務以外には好き放題にさせてくれるなら、八十のオジイサンのオメカケ

だつて厭だとはいわない。親分の
名を汚したの何だのと短刀をつき
つけられ小指をつめたり、ドスで
忠誠を誓わされ自由を束縛されて
は堪えられない。

私は母に厭だといつたが、もう
母親が承諾した以上、今更厭だと
いえば、命が危い。お前は母を殺
していいのかいといつて脅迫する。
仕方がないから、母には内密に、

私から断わることにして、近所の洗濯屋の娘で、薄馬鹿だけれども伝言の口上だけはひどく思いつめて間違いなくハッキリいつてくるという、潔癖のすぎたあげくの気違いのような娘がいて、私に変に親しみをこめて挨拶するような仲だから、この娘に伝言をたのんだ。私より三ツ年上のそのとき二十二であった。この娘が私にいわれた

通り、無理に親分に会わせてもらって、口上を間違いなく述べたから、親分は笑って、そうかい、よしよし、お駄賃をくれて帰して、その日のうちに相当の乾児こぶんを使者に破約を告げて、お嬢さんへ親分からの志とあって、まるで結納のように飾りたてた高価な進物をくれた。そうこうするうちオメカケなぞは国賊のような時世となつて、まっ

さきぎに徴用されそうな形勢だから、母は慌ててやむなくオメカケの口はあきらめ、徴用逃れに女房の口を、といいだしたけれども、たかがオメカケの娘だもの、華族様だの千万長者の三太夫の倅だつて貰いに來てくれるものですか。そこへ徴用が來たのだから、母は血相を変えた。そしてその晩、夕食の時にはオロオロ泣きだしてしまつ

たものだ。

世間の娘が概してそうなのか私は人のことは知らないけれども、私や私のお友達は戦争なんか大して関心をもっていなかった。男の人は、大学生ぐらいのチンピラ共まで、まるで自分が世界を動かす心棒でもあるような途方もないウヌボレに憑かれているから、戦争だ、敗戦だ、民主主義だ、悲憤

慷慨、熱狂協力、ケンケンガクガク、カミかえって大変な騒ぎだけれども、私たちは世界のことは人が動かしてくれるものだときめているから勝手にまかせて、世相の移り変りには風馬耳、その時々のお楽しみを見つけて滑りこむ。日頃オサンドンの訓練、良妻賢母、小笠原流、窮屈の極点に痛めつけられているから単純な遊びでも御満

悦で、戦争の真最中でも困らない。
国賊などと呼ばれても平チャラで
日劇かなんかグルリと取りまいて
三時間五時間立ちン坊をして、ひ
どく退屈だけれども、退屈でも面
白いのである。私は退屈というも
のは案外ほんとに面白いんじゃない
いかと思っっている。だってほかに、
ほんとに面白いという何かがある
のだろうか。

ところが女房となると全然別種
の人間で、これぐらい愚痴ッぽく
て我利我利人種はないのである。

職業軍人の奥方をのぞいたら、女
房と名のつく女で戦争の好きな女
は一人もいない。恨み骨髓に徹し
て軍部を憎み政府を呪っているの
も、自分の亭主が戦争にかりたて
られたり、徴用されたり、それだ
けの理由で、だから私にはわけが

分らない。私は亭主なんてムダで
高慢なウルサガタが戦争にかりだ
されて行つてしまえば、さぞ清々
するだろうに、と思われるのに。

生活的に男に従属するなんて、
そして、たった一人の男が戦争に
とられただけで、世界の全部がな
くなるようになるなんて、なんと
いうことだろう。私には、そんな
惨めなことは堪えられない。

私の母は、これはオメカケで、女房ではないのだけれども、これまた途方もなく戦争を憎み呪っていた。しかしさすがにオメカケらしく一向に筋が通らずトンチンカンに恨み骨髓に徹していて、タバコが吸えなかつたり、お魚がたべられなくなつたり、そんなことでも腹を立てていたが、何とってオメカケが国賊となり、私の売

れ口がなくなっただのが、口惜しさ
憎さの本尊だった。

「ああ、ああ、なんとこの世の中
だろうね」

と母は溜息をもらしたものだ。

「早く日本が負けてくれないかね。

こんな貧乏らしい国は、私はも
うたくさんだよ。あちらの兵隊は
二日で飛行場をつくるんだってね。

チーズに牛肉にコーヒーにチョコ

レートにアツプルパイにウイスキー
かなんかがないと戦争ができない
てんだから大したものじゃないか。
日本なんか、おまえ、亡びて、
日も早くあちらの領分になつてく
れないかね。そのとき私が残念な
のは日本の女が洋服を着たがるこ
とだけだよ。着物をきちやいけな
いなんてオフレが出たら、私やいつ
たい、どうすりゃいいんだい。お

まえは洋装が似合うからいいけれど、ほんとに、おまえ、そのときはシツカリしておくれよ」

要するに私の母は戦争なかばに手ツ取りばやく日本の滅亡を祈ったあげく、すでに早くも私をあちらのオメカケにしようともくろんだ始末で、そのくせ時ならぬ深夜に起き上って端坐して、雪夫や許しておくれ、などと泣きだしてし

まう。雪夫や、シツカリ、がんばれ負けるなというかと思うと、じれったいね、おまえ飛行機乗りは見張りがついてるわけじゃないんだから、敵陣へ着陸して、降参して、助けて貰えばいいじゃないか。どうせ日本は亡びるんだよ。ほんとにまア、トンマな子だったらありゃしない。

母は私の妹を溺愛のあまり殺し

ていた。盲腸炎で入院して手術の後、二十四時間絶対に水を飲ましてはいけないというのに、私と看護婦のいないとき幾度か水を飲ませたあげく腹膜を起させ殺してしまった。そのせいではないけれども、私は母に愛されるたび、殺されるような寒気を覚えるばかり、嬉しいと思つたこともないのである。無智なのだ。私は貧乏と無智

は嫌いであつた。

私はそのころまったく母の氣付かぬうちに六人の男にからだを許していた。その男たちの姓名や年齢、どこでどうして知りあつたか、そんなことは私はいいたくもないし、全然問題にしてもいないのだ。ただ好きであればいい、どこの誰でも、一目見た男でも、私がそれを思い出さねばならぬ必要がある

なら、私は思いだす代りに、別な男に逢うだけだ。私は過去よりも未来、いや、現実があるだけなのだ。

それらの男の多くは以前から屢々私にいい寄っていたが、私は彼らに召集令がきて愈々出征するといふ前夜とか二三日前、そういう時だけ許した。後日、娘たちの間に、出征の前夜に契って征途をはげま

す流行があるときいたが、私のは
そんな凜々しいものではなかった。
私はただクサレ縁とか俺の女だな
どとウヌボレられて後々までうる
さく付きまとわれるのが厭だから
で、六人のほかに、病弱の美青年
が二人、この二人にも許してい
と思っていたが、召集解除ですぐ
帰されそうなおそれがあったので、
許さなかった。果して一人は三日

目に戻って来たが、一人は病院へ入院したまま終戦を迎えた。

登美子さんは不感症だそうだ。

そのせいか、美男子を見ると、顫ふるえが全身を走ったり、堅くなったり、胸がしめつけられたり、拳をにぎったり、圧迫されるそうだけれども、私はそんなことはない。

私は不感症の反対で、とても快感を感じる。けれども私はその快

感がたつて必要な快感だとも思わないので、そういう意味で男の必要を感じたことは一度もなかった。ちよつと感じても、すぐまぎれて、忘れてしまうことができる。だから私は六人の男に許したときも、自分が浮気だとは思わずに、電車の中だの路上だので、思わずあか赧くなったり胴ぶるいがするという登美子さんが、よっぽど浮気なのだ

と思っっている。私はあんなことは
平凡で適度なのが好きだ。中には
色々変な術を弄して夢中にさせる
男もいるけれども、あとで思いだ
すと不愉快で、ほんとに弄ばれた
とか辱しめられたという気持にな
るから、あんな時にあんな風に女
を弄ぶ男は嫌いだ。あんなことは
平凡で、常識的で、適度でなけれ
ばならないものだ。

私は終戦後三木昇に路上であつてお茶をのんだが、そのとき思いついたように私を口説いて、技巧がうまくてそのうえ精力絶倫で二日二晩窓もあけず枕もとのトーストやリンゴを嚙かじりながら遊びつづけることもできるのだから、どんな浮気な女でも夢中になつたり、感謝したりするなどといった。私は夢中になるのは好きじゃないと

答えたが、彼は女のとれかくしだ
と思つて、ネ、いいだろう、路上
で私の肩をだいたが、抱かれた私
は抱かれたまま百米メートルほど歩いたけ
れども、私はそんな時は食べもの
のことかなんか考えていて、抱い
ている男のことなどは考えていな
い。

私は男に肩をだかれたり、手を
握られたりしても、別にふりほど

こうともしないのだ。面倒なのだ。
それぐらいのこと、そんなことを
してみたいなら、勝手にしてみる
がいいじゃないか。するとすぐ男
の方はうぬぼれて私にその気があ
ると思っ て接吻しようとしたりす
るから、私は顔をそむける。しか
し、接吻ぐらいさせてやることは
何度もあった。顔をそむける方が
面倒くさくなるから。すると忽ち

からだを要求してくるけれども、
うん、いつかね、と答えて、私は
もうそんな男のことは忘れてしま
う。

私の徴用された会社では、私が
全然スローモーションで国民学校
五年生ぐらいの作業能力しかない

ので驚いた様子であった。私はすぐ事務の方へ廻されたが、ここでも問題にならなかった。

けれども別に怠けているわけでもなく、さりとして特別につとめるなどということとは好きな男の人にもしてあげたことのない性分なのだから、私はヒケメにも思わなかったし、人々も概して寛大であった。

会社は本社の事務と工場の一部

を残して分散疎開することになり、私の部長は工場長の一人となつて疎開に当り、私にうるさく疎開をすすめた。

私が何より嫌いなのは病気になることと、そして、それ以上に、死ぬことであつた。戦争が本土ではじまることになつたら山奥へ逃げこんでも助かるつもりでいたが、まだ空襲の始まらぬ時だったので、

遊び場のない田舎へ落ちのびる気持にもならなかった。

私は平社員、課長、部長、重役、立身出世の順序通りに順を追って口説かれたが、私は重役にだけ好感がもてた。若い男達が口説くというよりただもうむやみにからだを求めるのを嫌うわけではなく、私自身は肉慾的な要求などはあんまりないのだけれども、私は男女

が愛し合うのは当然だと思っ
ており、その世界を全面的に認
めていくから、たとえば三木昇
が好色で肉情以外に何もな
くとも、そのことで軽蔑はし
なかつた。できないのだ。文
化といふのだか、教養とい
ふのだか、なんだか私にもよ
く分らぬけれども、精神的に
何か低いから厭になつただけ
であつた。

母の旦那は大きな商店の主人で

あつたが、山の別荘へ疎開した。
その隣村の農家だかに部屋がある
からという知らせがきて、母は疎
開したがつたが、私が徴用で動け
ないので、大いに煩悶していたが、
空襲がはじまり、神田がやられ、
有楽町がやられ、下谷がやられ、
近いところにポツポツ被害があつ
たりして、母も観念して单身荷物
と共に逃げだした。母もまた私同

様病気と死ぬことが何よりの嫌いで、雪夫は医者に育てるのだと小さい時からきめていたのは、少しでも長生きしたいという計算からであった。

母は一週間に一度ずつ私を見廻りに降りてきた。けれども実際は若い男と密会のためで、これだけは私に隠しておきたかったのだけれども、交通も通信も不自由で、

打合せがグレハマになるから、仕上げは御見事というわけにも行かず、男を家へひきいれて酒をのみ泊めてやることもあった。

私は母だから特別の生き方を要求するような気持は微塵もなく、私が自由でありたいように、母も私に気兼ねなどしない方がサツパリして気持がいいと思っていたが、私はしかし母が酔っ払うとダラシ

なくなるのと、男が安ッポすぎたのでなさけなかつた。

三月十日の陸軍記念日には大空襲があるから三月九日には山へ帰るのだと母はいつていた。そのくせ男との連絡がグレハマにいったので、九日の夜にはいつてようちく男に会えて家へつれてきて酒をのんでいた。この日のために山から持ってきた鶏だの肉だの、薄暗

がりで料理する女中につきあつて
私も起きており、警戒警報のでた
時は母の酒宴はまだ終らず、私の
きいているラジオの前へやつてき
て、ダイヤルの光をたよりにまた
酒もりをはじめた。三機ほど房総
の方からはいつてきて投弾せず引
返し、またしばらくして三機ほど
同じコースからはいつてきて、こ
れも投弾せず引返してしまった。

もう引返してしまっただから解除になるだろうなどといっている、
外の見張所で、敵機投弾、火事だ
火事だ、という。すると私たちの
頭上をガラガラひどい音がした。

二階の窓へ物見に行った女中が大
変、もう方々一面に火の手があがっ
ているという。わけが分らずボン
ヤリしているうちに空襲警報がなっ
たのだ。

モンペもつけず酔っ払っていた
母の身仕度に呆れるぐらいの時間
がかかったけれども、夜襲の被害
を見くびることしか知らなかった
私は窓をあけて火の手を見るだけ
の興味も起らず暗闇の部屋にねこ
ろんでおり、荷物をまとめて防空
壕へ投げこんで戻るたび、あつち
へも落ちた、こつちにも火の手が
あがったというけたたましい女中

の声をきき流していた。

そのとき母のさき^{さき}に身仕度をととのえて私の部屋へきていた男が酒くさい顔を押しつけてきて、私が顔をそむけると、胸の上へのしかかかってモンペの紐をときはじめたので、私はすりぬけて立ちあがった。母がけたたましく男の名をよんでいた。私の名も、女中の名もよんだ。私は黙って外へでた。

グルリと空を見廻したあの時の
私の気持というものは、壯観、爽
快、感歎、みんな違う。あんなこ
とをされた時には私の頭は綿のつ
まったマリのように考えごとを喪
失するから、私は空襲のことも忘
れて、ノソノソ外へでてしまった
ら、目の前に真ッ赤な幕がある。
火の空を走る矢がある。押しかた
まって揉み狂い、矢の早さで横に

走る火、私は吸いとられてポカンとした。何を考えることもできなかった。それから首を廻したらどっちを向いても真ッ赤な幕だもの、どっちへ逃げたら助かるのだから、私はしかしあのととき、もしこの火の海から無事息災に脱出できれば、新鮮な世界がひらかれ、あるいはそれに近づくことができるような野獣のような期待に亢奮した。

翌日あまりにも予期を絶した戦
争の破壊のあとを眺めたとき、私
は住む家も身寄の人も失っていた
が、私はしかしむしろ希望にもえ
ていた。私は戦争や破壊を愛しは
しない。私は私にせまる恐怖は嫌
いだ。私はしかし古い何かが亡び
て行く、新らしい何か近づいて
くる、私はそれが何物であるか明
確に知ることはできなかつたが、

私にとっては過去よりも不幸ではない何か近づいてくるのを感じつづけていたのだ。

全くサンタンたる景色であつた。焼け残つた国民学校は階上階下階段まで避難民がごろごろして、誰の布団もかまわず平気で持つてきてごろごろ寝ている男達、人の洋服や人のドテラを着ている者、それは私のだといわれて、じゃア借

りどくよですんでしまう。顔にヤケドして顔一面に軟膏ぬって石膏の面みたいな首だけだして寝ている十七八の娘の布団を、三枚は多すぎらといって一枚はいで持つて行って自分の連つれの女にかけてやる男もある。何かねえのか食べ物は、と人のトランクをガサガサ掻きまわすのを持主がポカンと見ているていたらくで、あつちに百人死ん

でる、あの公園に五千人死んでるよ、あそこじゃ三万も死んでら、命がありや儲け物なんだ、元気だせ、幽霊みたいな蒼白な顔で一家の者を励ます者、屍体の底の泥の中に顔をうずめて助かって這いだしてきたという男はその時は慾がなかつたけれどもこうして避難所へ落着いてみると無一物が心細くて、かきわけた屍体に時計をつけて

た腕があつたが、せめてあの時計を頂戴してくればよかつたといつてゐる。この男はまだ顔の泥をよく落しておらないけれども、大概似たような汚い顔の人たちばかり、顔を洗うことなんか誰も考えていない。

私と女中のオソヨさんは水に浸した布団をかぶつて逃げだしたが、途中に火がつき、布団をすて、コー

トに火がついてコートですて、羽織も同じく、結局二人ながらあわせ裕一枚、無一物であつたが、オソヨさんの敏腕で布団と毛布をかりてくるまり、これもオソヨさんの活躍で乾パンを三人前、といつたつて三枚だ、一日にたつたそれだけ、あしたはお米を何とかしてあげる、と係りの者がいうので空腹だけでも我慢して、そして私はオソヨ

さんが、もう東京はイヤだ、富山の田舎へ帰る、でも無一物で、どうして帰れることやら、などとせまざまにこぼすのをきききながら、私はしかし、ほんとにそうね、などと返事をして、実際は無一物など気にしていなかった。

何も持たない避難民同士のなかから布団と毛布がころがりこむし、三枚の乾パンでは腹がぺこぺこだ

けれども、あしたはお米がくると
いうから、私は空腹よりも、こう
して坐っていると人が勝手にいろ
いろ何とかしてくれるのが面白く
て仕方がない。私はちよつとした
空腹などより、人間同士の生活の
自然のカラクリの妙がたのしい。
窮すれば通ず、困った時には自然
に何とかなるものだ、というのが、
私がこれまでに得た人生の原理で、

私に母をたよる気持のないのも、
私の心の底にこんな瘤みたいな考
えがあるせいだろう。私は我まま
ーぱいに育てられたけれども、た
とえば母も女中も用たしにでて私
一人で留守番をしてお料理はお前
が好きなようにこしらえておあが
りといわれていても、私は冷蔵庫
のお肉やお魚には手をつけずカン
ヅメをさがす、カンヅメがなけれ

ば御飯にカツブシだけ、その出来あがった御飯がなければ、あり合せのリンゴやカステラの切はしだけでも我慢していられる。ペコペコの空腹でも私はねころんで本を読んでいるのだ。だから我ままーぱいなどといつても空腹には馴れており、それも我ままのせいかも知れないけれども、我ままもまた相当に困苦欠乏に堪える精神を養

成するもので、満堂数千の難民のなかで私が一番不平をいわないようだった。

私自身がそんな気持だから、人々の不幸が私にはそれはいうまでもなく不幸は不幸に見えるけれども、また、別のものに見えた。私には、たしかに夜明けに見えたのだ。

私はハッキリ母と別な世界に、私だけで坐っている自分を感じつ

りだしにつきあつてくれる味方の
ようなたのもしさにしか思われず、
子供は泣き叫び空腹を訴え、大人
たちは寒気と不安に蒼白となり苛々いらいら
し、病人たちが呻いていても、そ
してあらゆる人々が泥にまみれて
いても、私は不潔さを厭いもしな
ければ、不安も恐怖もなく、むし
ろ、ただ、なつかしかった。私の
ような娘（私のような娘が何人い

るのか私は知らないけれども）と
もかく私のような娘にとっては、
日本だの祖国だの民族だのという
考えは大きすぎて、そんな言葉は
空々しいばかりで始末がつかない。
新聞やラジオは祖国の危機を叫び、
巷の流言は日本の滅亡を囁いてい
たが、私は私の生存を信じること
ができたので、そして私には困っ
た時には自然にどうにかなるもの

だという心の瘤があるものだから、
私は日本なんかどうなっても構わ
ないのだと思っていた。

私には国はないのだ。いつも、
ただ現実だけがあつた。眼前の大
破壊も、私にとっては国の運命で
はなく、私の現実であつた。私
は現実はただ受け入れるだけだ。
呪つたり憎んだりせず、呪うべき
もの憎むべきものには近寄らなけ

ればよいという立前で、けれども、
たった一つ、近寄らなければよい
主義であしらうわけには行かない
ものが母であり、家というもので
あった。私が意志して生れたわけ
ではないのだから、私は父母を選
ぶことができなかつたのだから、
しかし、人生というものは概して
そんなふうに行きあたりバツタリ
なものなのだろう。好きな人に会

うことも会わないことも偶然なん
だし、ただ私には、この一つのも
の、絶対という考えがないのだか
ら、だから男の愛情では不安はな
いが、母の場合がづらいのだ。私
は「一番」よいとか、好きだとか、
この一つ、ということが嫌いだ。
なんでも五十歩百歩で、五十歩と
百歩は大変な違いなんだと私は思
う。大変でもないかも知れぬが、

ともかく五十歩だけ違う。そして、その違いとか差というものが私にはつまり絶対というものに思われる。私は、だから選ぶだけだ。

オソヨさんが富山へ帰る途中に赤倉があるから、私は山の別荘へ母の死去を報告に行ってみようか、会社へ顔をだしてみようか、迷っているうち、布団と毛布の持主が立去ることになり、仕方がないか

ら私も山へ行こうと思っていたら、専務が私を探しにきてくれた。どうにかなるということが、こうして実際行われてくるのを知りうる。ことが、私を特別勇気づけてくれた。

私は山の別荘へ行くことは好まなかった。母の旦那と私には血のつながりはないのだけれども、やっぱり親の代理みたいに威張られ束

縛されるのが不安であつたし、私はそれに避難民列車にのつて落ちて行くのがなんとも惨めで堪えがたい思いになつていた。

避難民は避難民同士という垣根のない親身の情でわけへだてなく力強いところもあつたが、垣根のなさにつけこんで変に甘えたクズレがあり、アヤメも分たぬ夜になると誰が誰やら分らぬ男があつち

からこっちから這いこんできて、
私はオソヨさんと抱きあって寝て
いるからオソヨさんが撃退役でシッ
シッと猫でも追うように追うのが
おかしくて堪らないけど、同じ男
がくるのだから別の男なのだから、入
り代り立ち代り眠るまもなく押し
よせてくるので、私たちは昼間で
ないと眠るまがない。

日本人はいつでも笑う。おくや

みの中でも笑っているそうだけれども、してみると私なんか日本人の典型ということになるのか、私は人に話しかけられると大概笑うのである。その代りには、大概返事をしたことがない。つまり、返事の代りに笑うのだ。なぜといって、日本人は返事の気持の起らない月並なことばかり話しかけるのだもの、今日は結構なお天気でご

ございます、お寒うございませす、い
わなくつても分りきつていゝるのだ
から、私がほんとにそうござい
ますなんて返事をしたら却て先さ
まを軽蔑、小馬鹿のように扱う気
がするから、私は返事ができなく
て、ただニツコリ笑う。私は人間
が好きだから、人を軽蔑したり小
馬鹿にしたり、そんな気のきいた
ことはとてもできない。今日は結

構なお天気でございます、お寒う
ございます、私はあるがまま受け
入れて決して人を小馬鹿にしない
証拠に最も愛嬌よくニツコリ笑う。
すると人々は私が色っぽいとか助
平たらしいとかいっているのである。

私は元来無口のたちで、喋らな
くてもすむことなら大概喋らず、
タバコが欲しい時にはニコウと手
を突きだす。タバコちょうだい、

とってちようだい、そんなことを
いわなくともタバコの方へ手をの
ばせば分るのだから、黙って手を
ニコウとだす、するとその掌の上
へ男の人がタバコをのせてくれる
ものだときめているわけでもなく
て、のせてくれなければタバコの
ある方へ腰をのばしてますますニコ
ウと手を突きのはして、あげくに、
ひっくりかえってしまふこともあ

るけれども、私は孤独になれていて、人にたよらぬたちでもあり、怠け者だから一人ぼっちの時でも歩いて取りに行かず、腰をのばし手をのばして、あげくに掴んだとたん、ひっくりかえるというやり方であつた。けれども男は女に親切にしてくれるものだと思得ているから、男の人が掌の上へタバコをのっけてくれても、当り前に心

得て、めったに有難うなどとはいったことがない。

だから私はあべこべに、男の人が私の膝の前のタバコを欲しがっていることが分ると、本能的にとりあげて、黙ってニユウと突きだしてあげる。そういうところは私は本能的に親切で、つまり女というものの男に対する本能的な親切なのだろう。その代り、私は概ね

ウカツでボンヤリしているから、
男の人が何を欲しがっているか、
大概は気がつかないのである。し
かし根は親切そのもので、知らな
い男の人にもわけへだてなく親
切だから、登美子さんは私のこと
を天下に稀れな助平だという。つ
まり、たまたま汽車の隣席に乗り
合せた知らない男の人がマツチを
探しているのを見ると、私は本能

的に私のポケットのマッチをつかんで黙ってニユウとつきだしてあげる。私は全く他意はなく、女というものの男に対する本能だもの、これは親切とよぶべきもので、助平などとは意味が違うものなのだ。電車の中で正面に坐っている美青年に顔をほてらせたり、からだか堅くなったり、胸や腰がキュウとしまるといふ登美子さんが、それ

も本能だろうから、私は別に助平
だとは思わないが、私にくらべて
浮気だろうと思うのである。

けれども男の人たちも登美子さ
んと同じように私の親切を浮気の
せいだと心得て、たちまち狎なれて
口説いたり這いこんだりする。特

別、避難所の国民学校では屈する
ことなくしっきりなしの猛襲にう
んざりして、こんな人たちとこん

な風に都を落ちて見知らぬ土地へ
流れるなんて、私はとても、甘え
すぎたクズレが我慢のできない気
持でもあった。

だから私は専務を見るとホッと
安堵、私はたちまち心を変えて別
荘への伝言をオソヨさんにたのみ、
私は専務にひきとられた。

久須美（専務）は五十六であつた。

さして痩せてるわけでもないが、六尺もあるから針金のようまなこにみえる。獅子鼻で、ドングリ眼で、醜男そのものだけれども、私はしかし、どつというせいか、それが初めから気にかからなかつた。まじりけのない白髪が私にはむしろ可愛く見え、ドングリ眼も獅子鼻も愛

嬌があつて私はほんとに嘘や虚勢
ではなく可愛く見える。私は少女
のころから男の年齢が苦にならず、
女学生の時も五十をすぎた教頭先
生が好きでたまらなかつた。この
人も美しい人ではなかつた。

終戦後、久須美は私に家をもた
せてくれたが、彼はまったく私を
可愛がつてくれた。そしてあると
き彼自身私に向つて、君は今後何

人の恋人にめぐりあうか知れないが、私ぐらい君を可愛がる男にめぐりあうことはないだろうな、と
いった。

私もまったくそうだと思った。

久須美は老人で醜男だから、私は他日、彼よりも好きな人ができるかも知れないけれども、しかしどのような恋人も彼ほど私を可愛がるはずはない。

彼が私を可愛がるとは、たとえば私が浮気をするとな刃庖丁かなにか振り廻して千里を遠しとせずつ復縁をせまうて追いまわすという情熱についてのことではなくて、彼は私が浮気をしても許してくれる人であつた。

彼は私の本性を見ぬいて、その本性のすべてを受けいれ、満足させてくれようとする。彼が私に敢

て束縛を加えることは、浮気だけはなるべくしてくれな、浮気するならば分らぬようにしてくれ、というぐらいのことだけであった。

だいたい私みたいなスローモーションの人間は、とても世間並の時間の速力というものについて行けない。けれども私は人と時間の約束したり一つの義務を負わされ

ると、とても脅迫観念に苦しめられるけれども、どうしてもスローモーションだからダメで、会社へでていたころは二時間三時間、五時間六時間おくれる。終業の三十分前ぐらいに出勤して、今ごろ出てくるなら休みなさいなどと皮肉られても、私だってそんな出勤が無意味と知りながら出てゆくからには、どんなに脅迫観念に苦しめ

られていたが、久須美だけはそれを察して、専務が甘やかすから、などと口うるさくても、彼は私に一言の非難もいわず、常にむしろいたわってくれた。

私は好きな人と、たとえば久須美と、旅行の約束をして、汽車の時間を二時間三時間おくれてしまう。たとえば私が出かけようとして身支度ととのえているとじろく、

知りあいの隠居ジイサンなどがやつてきて、ほらぐらんよ、うちの盃もう宗そうでこんなタバコ入れをこしらえたから、などと見せにきて一時間二時間話しこむ。私は嫌いな人でも今日は用があるから帰ってなどとはいえないたちで、まして仲よしの隠居ジイサンだから、帰って、とはとてもいえない。私は私の意志によってどっちの好きな人

を犠牲にすることもできないから、
眼前に在る力、現実の力というも
のの方にひかれて一方がおろそか
になるまでのことで、これは私に
とっては不可抗力で、どうするこ
ともできないのだもの。

久須美はそういう私をいたわっ
てくれた。だから私たちの旅行は
トンチンカンで、目的地へつか
ないうちに、この汽車はここまでだ

から降りてくれという、つまり汽
車がなくなっただのだから、仕方なしに
思いがけないところで降されて、
しかし、そのために叱られるとい
うことのない私はそのトンチンカ
ンが新鮮で、パノラマを見ている
ような楽しい思いがけない旅行に
なる。

ほんとうに醜い人間などいるは
ずのないもので、美というものは

常に停止して在るのじゃなくて、
どんなものでも、ある瞬間に美し
かったり、醜かったりするものだ。
私にとって、寢室の久須美は常に
可愛く、美しかった。

私は若い女だもの、美しい青年
と腕を組んで並木路を歩いたり、
美青年に荷物をもってもらったり
自動車をよびに走ってもらったり、
チヤホヤかかずかかれて銀座など買

物に歩いて、人波を追いつ追われ
つ、人波のあいまから目と目を見
合せて笑いあう。

久須美にはもうそんな若い目は
なくなっている。そして、そんな
仇あだな目のかわりには、ゴホンゴホ
ンという咳などしかなくなってい
るのである。

しかし、そんな若い目は、男と
女のつながりの上では、たかが風

景にすぎないではないか。並木路の散歩、楽しい買物、映画見物、喫茶店、それらのことは、恋人同士の特権のように思われがちだけれども、私はあべこべに、浮気心、仇心の一興、また、一夢というよ
うなものにすぎないと考える。

私はむかし六人の出征する青年に寝室でやさしくしてあげたが、
また、終戦後も、久須美の知らな

いうちに、何人かの青年たちと寝室で遊んだこともある。けれどもそれもただ男と女の風景であるにすぎず、いわば肉体の風景であるにすぎない。

しかし久須美に関する限り私はもはや風景ではなかった。

私が一人ぽっちなころで、本を読んでいたり、物思いにふけていたり、ひとひとしてゐるとき

久須美が訪れてくる。どのような面白い読書でも、静かな物思いでも、安らかな眠りでも、私はそれを捨てたことを露すらも悔みはしない。私はただニッコリし、彼をむかえ、彼の愛撫をもとめ、彼を愛撫するために、二本の腕をさしだして、彼をまつ。私はその天然自然の媚態だけが全部であつた。

このような媚態は、久須美が私

に与えたものであつた。私はその時まで、こんな媚態を知らなかつたのに、久須美にだけ天然自然にこうするようになったので、つまり彼が一人の私を創造し、一つの媚態を創作したようなものだった。

それは一つの感謝のまごころであつた。このまごころは心の形でなしに、媚態の姿で表われる。私はどんなに快い眠りのさなかでも

ふと目ざめて久須美を見ると、モーローたる嗜眠状態のなかでニッコリ笑い両腕をのばして彼を待ち彼の首ににじりよる。

私は病気の時ですら、そうだった。私は激痛のさなかに彼を迎え、私は笑顔と愛撫、あらゆる媚態を失うことはなかった。長い愛撫の時間がすぎて久須美が眠りについたとき、私は再び激痛をとりもど

した。それはもはや堪えがたいものであつたが、私はしかし愛撫の時間は一言の苦痛も訴えず最もかすかな苦悶の翳によつて私の笑顔をくもらせるようなこともなかつた。それは私の精神力というものではなく、盲目的な媚態がその激痛をすら薄めているという性質のものであつた。七転八倒というけれども、私は至極の苦痛のために

ある一つの不自然にゆがめられた
姿勢から、いかなる身動きもでき
なくなり、生れて始めて呻く声を
もらした。久須美は目をさまし、
はじめは信じられない様子であつ
たが、慌てて医師を迎えたときは
手おくれで、なぜなら私はその苦
痛にもかかわらず彼が自然に目を
さますまで彼を起さなかつたから、
すでに盲腸はうみただれて、腹の

中は膿だらけであり、その手術には三時間、私は腹部のあらゆる臓器をいじり廻されねばならなかった。

この天然自然の育ち創られてきた媚態を鑑賞している人は久須美だけが一人であった。

若い目と目が人波を距ててニッコリ秘密に笑いあうとき、そこには仇な夢もこもり、花の匂いも流

れ、若さのおのずからの妖しさもあつたが、だからまた、そこには、退屈、むなしさ、自ら己を裏切る理智もあつた。要するに仇心、遊びと浮氣の目であつた。

美青年に手を握られてみたいよ
うな、なんとなくそんな気持になる時もあり、美青年と一緒に泊りたわむれてウツトリさせられたり、私はしかしそんな遊びのあとでは、

いつも何かつまらなくて、退屈、
私は心の重さにうんざりするの
であつた。

しかし私が久須美をめぐけてウツ
トリと笑い両手を差しのべてにじ
りより、やがて胸に白髪をだきし
めて指でなでたりいじつてやつた
り愛撫に我を忘れるとき、私の笑
顔も私の腕も指も、私のまごころ
の優しさが仮に形をなした精、妖

精、やさしい精、感謝の精で、もはや私の腕でも笑顔でもなく、私自身の意志によって動くものではないようだった。

つまり私は本性オメカケ性というのだろう。私の愛情は感謝であり、私は浮気るときは男に遊ばせてもらってウツトリさせられたりするけれども、私自身が自然の媚態と化してただもう全的に男のた

めに私自身をささげるときは、感謝によるのであった。要するに私は天性の職業婦人で、欲しいものを買っていただけ、好きな生活をさせてもらう返礼におのずから媚態と化してしまう。そのかわりお洗濯をしてあげたいとか、お料理をこしらえて食べさせてあげたいとか、考えたこともない。そんなものはクリーニング屋とレストラ

ンで間に合わせればよいと思って
おり、私は文化とか文明というも
のはそういうものだと考えていた。

私はしかしあんまり充ち足り可
愛がられるので反抗したい気持ちに
なることがあった。反抗などとい
うことはミミツちくて、私はきら
いなのだ。私は風波はすきではな
い。度を過した感動や感激なども
好きではない。けれども充ち足り

るということが変に不満になるのは、これも私のわがままなのか、私は、あんな年寄の醜男に、などと、私がもう思いもよらず一人に媚態をささげきっていることが、不自由、束縛、そう思われて口惜しくなったりした。実際私はそんな心、反抗を、ムダな心、つまりらぬこと、と見ていたが、おのずから生起する心は仕方がない。

ふと孤独な物思い、静かな放心から我にかえったとき、私は地獄を見ることがあつた。火が見えた。一面の火、火の海、火の空が見えた。それは東京を焼き、私の母を焼いた火であつた。そして私は泥まみれの避難民に押しあいへしあい押しつめられて片隅に息を殺している。私は何かを待っている。何ものかは分らぬけれど、それは

久須美でないことだけが分つていた。

昔、あのととき、あの泥まみれの学校いっばいに溢れたつ悲惨な難民のなかで、私はしかし無一物そして不幸を、むしろ夜明けと見ていたのだ。今私がふと地獄に見る私には、そこには夜明けがないよ。うだ。私はたぶん自由をもとめているのだが、それは今では地獄に

見える。暗いのだ。私がもはや無
一物ではないためかしら。私は誰
かを今よりも愛すことができる、
しかし、今よりも愛されることは
あり得ないという不安のためかし
ら。燃える火の涯もない曠野のな
かで、私は私の姿を孤独、ひどく
冷めたい切なさに見た。人間は、
なんてまアくだらなく悲しいもの
だろう、馬鹿げた悲しさだと私は

いつもそんなときに思いついた。

私が入院しているとき、お相撲の部屋の親方だかが腫物か何かで入院しており、一門のお弟子、関取から^{とりてき}取的まで、食事のドンブリや鍋に何か御馳走を運んできたり、お酒をぶらさげてきたり賑やかだったが、その一人に十両の墨田川と
いうのは私の同じ町内、同じ国民学校の牛肉屋の子供で、出征の前

夜に私の許した一人であつた。

さつそく私に結婚してくれなど
といつたけれども、彼も物分りの
悪い男ではなく、女に不自由のな
い人気稼業で、十両ぐらいで結婚
なんて、おかしいでしよう、とい
うと、じゃア時々会つてなどとい
たが、病後だからとその時はすん
だけれども、巡業から戻ってくる
たび、毎日のようにやつてくる。

墨田川は下町育ちだから理づめの相撲で、突っぱって寄る、筋骨質でふとつてはいないけれど腰が強くても投げもあり、大関まで行けると噂のある有望力士であったが、下町気風のあつさり勝負を投げてしまふところがあつて、しつこく食いさがるねばりがない。稽古の時は勝つても負けてもとても綺麗で、調子づくくと五人十人突き

とばして役相撲まで食ってしまおう
地力があるのに、本場所になると
地力がでずに弱い相手に負けるの
は、ちよつと不利になるとシマツ
タと思う、つまり理智派の弱点で、
自分の欠点を知っているから、
ちよつとの不利にも自ら過大にシ
マツタと思う気分の方が強くて、
不利な体勢から我武者羅がむしやらに悪闘し
てあくまでネバリぬく執拗なところ

ろが足りないのだ。シマツタと思
うとズルズル押されて忽ちたわい
もなくやられてしまう。弱い相手
に特にそうで、強い相手には大概
勝つ。つまり強い相手には始めか
ら心構えや気組が変わって慎重な注
意と旺盛な闘志を一丸に立向って
いるからなのである。

私は勝負は残酷なものだと思っ
た。もてる力量などはとてもたよ

りないもので、相撲の技術や体力
や肉体の条件のほかにも、そういう
精神上の条件、性格気質などもやっ
ぱり力量のうちなのだろうか。有
利の時にはちっともつけあがらず、
相撲しすぎるといふことがなく、
理づめに慎重にさばいて行く、い
かにも都会的な理智とたしなみと
落ち着きが感じられるくせに、不利
に対して敏感すぎて、彼の力量な

ら充分押しかえせる微小な不利にも頭の方で先廻りをして敗北という結果の方を感じてしまう。だから一気に弱気になって、こんなことではいけない、ここでガンバラなくてはと気持をととのえた時には、もう取り返しがつかないほど追いこまれていて、どうにもならない。

私は稽古も見に行つたし、本場

所は毎日見た。彼は私の席へきて
前頭から横綱の相撲一々説明して
くれるが、力と業の電光石火の勝
負の裏にあまり多くの心理の時間
があるのを知った。力と業の上で
一瞬にすぎない時間が、彼らの心
理の上では彼らの一日の思考より
も更に多くの思考の振幅があるの
であつた。大きな横綱が投げとば
されて、投げにかけられる一瞬前

に、彼の顔にシマツタというアキラメが流れる、私にはまるでシマツタという大きな声がきこえるような気がするのだった。

相撲の勝負はシマツタと御当人が思った時にはもうダメなので、勝負はそれまで、もうとりかえしがつかない。ほかの事なら一度や二度シマツタと思ってもそれから心を取り直して立直ってやり直せ

るのに、そのきかない相撲とい
う勝負の仕組はまるで人間を侮蔑
するように残酷なものに思われた。
相撲とりの心が単純で気質的に概
してアツサリしているのは、彼ら
の人生の仕事が常に一度のシマツ
タでケリがついて、人間心理のフ
リ出しだけで終る仕組だから、だ
から彼らは力と業の一瞬に人間心
理の最も強烈、頂点を行く圧縮さ

れた無数の思考を一気に感じ、常に至極の悲痛を見ているに拘らず、まるでその大いなる自らの悲痛を自ら嘲笑軽蔑侮辱する如くにたった一度のシマツタですべてのケリをつけてしまい、そういう悲劇に御当人誰も気付いた人がなく、みんな単純でボンヤリだ。

エツちゃん（墨田川は私たちの町内ではそうよばれていた）は特

別わが心理の弱点で相撲の勝負を
つけてしまい、シマツタと思わな
くともよいところで、過大にまた
先廻りをしてシマツタと思つて、
そしてころころ負けてしまう。エッ
ちゃんの勝負を見ていると、ア、
シマツタ、とか、やられた、とか、
ア、畜生め、なんでい、そうか、
一瞬の顔色が、私にはいつもその
都度いろいろの大きな呼び声にき

こえてきて、するともう見ていられない気持になる。

あなたは御自分の不利にだけ敏感すぎるからダメなのよ。御自分のアラには気がつかず人のアラばかり気がつく人なんてイヤだけど、相撲の場合はそういうヤボテンの神経でなければダメなんだわ。いつでも何クソとねばらなければいけないわ。そうすれば、大関にも

横綱にもなれるのよ。私は彼にそ
ういった。この忠言は彼をかなり
発奮させ、二三度勝つて気を良く
したが、その次の相撲で、例のシ
マツタ、そこで一気に不利になり、
いつもならもうダメなところで私
の忠告がきいたのが、思いもよら
ず立直つて、とうとう五分の体勢
まで押し返したから、すばらしい、
エッちゃんとうとう悟りをひらい

て、もう、こうなれば勝てると思っ
たのに阿修羅の怪力大勇猛心で立
直りながら急にそこから気がぬけ
たようにズルズルと負けてしまっ
た。そしてそれからまた元のモク
アミ、自信を失っただけ、却って
いけないようなものだった。

「どうしてあそこで気がぬけたの。
でも、あそこまで、立直ったので
すもの、気持をくさらせて投げて

しまわなければ、あなたは立直る
実力があるのね。そこまでは証明
済みですから、今度はその先をガ
ンバツてごらんなさい」

と私のはげましてあげても、エッ
ちゃんは浮かかない顔で、いっぺん
自信がくずれると、せつかくの大
勇猛心や善戦が身にすぎた奇蹟の
ように思われるらしく、その後は
ますますネバリがなくなり、シマッ

夕と思うと全然手ごたえなくへ夕
へ夕だらしく負けようになっ
た。

力だけが物をいうヤボな世界だ
と思っていたのに、あんまり心の
デリケートな世界で、精神侮蔑、
人間侮蔑、残酷、無慙なものだか
ら、私はやりきれなかった。昔は
関脇ぐらいまでとり、未来の大横
綱などといわれた人が、十両へ落

ち、あげくには幕下、遂には三段目あたりへ落ちて、大きな身体でまたコロコロ負かされている。芸術の世界などだつたら、個人的に勝負を明確に決する手段がないのだから、落伍者でも誇りやウヌボレはありうるのに、こうしてハッキリ勝敗がつく相撲というものは負けて落ちてゆく、ウヌボレ慰めの余地がない。残酷そのもの、

精神侮蔑、まるで人の当然な甘い
心をむしりとり人間の畸形児をつ
くりあげている、たえがたい人間
侮蔑、だから私はエツちゃんが勝つ
たときは却ってほめてやる気にな
らず、負けた時には慰めてやりた
いような気持になつた。

その場所の始まる前に巡業から
帰ってきて、

「僕はサチ子さんの気質を知って

いるから、くどくいいたくないけれど、好きなんだから仕方がないよ。いつも口説くたんびに、ええ、そのうちに、とか、いつかね、とか、どうもね。だから、こっちもキマリが悪いけど、僕も、もう、東京がつくづく厭でね、それというのが本場所があるからで、以前は本場所を待ちかねたものだけど、ちかごろは重荷で、そのせいだけ

で、ふるむとのお江戸へ帰るのが
苦しいのさ。それでもいくらか帰
る足が軽くなるのはサチ子さんが
いるというひとつだけで、さも
なきや、廃業したいぐらい厭気ざ
しているのだが、廃業しちゃア、
サチ子さんも相手にしてくれない
だろうなぞと考えて、ともかく裸
シヨウバイになんとか精を出すよ
うに努めているのだ。こんな僕だ

から思いはいっぱいだけど、自分
一人勝手のわがままはいいたくな
い。それはこんなシヨウバイをし
ているオカゲで、取柄といえは、
女と男のことだけはいくらか身に
しみて分るんだな。僕らはよくヒ
イキの旦那の世話になる。旦那と
いうものにはオメカケがいるもの
だが、旦那はみんないい人たちで、
だからサチ子さんの旦那でも僕に

は旦那という人が、みんないたわつてあげたいような気持になる。だから僕の見てきたところでも、オメカケが浮気をしてロクなことになつたタメシはないね。罰が当るんだ。けれども、サチ子さん、僕にはもう心の励みがあなた一人なんだから、僕は決して女房になつてくれ、そんな無理なことはいわない。こうして毎日つきあつても

らって、それで満足できりゃいいけど、別れて帰ると、なんとも苦しい。ほかの女でまにあうというものじゃアないんでね。巡業に出ているうちは忘れられる。じつして目の前に見ちゃ、ダメだ。僕が相撲をとってるうち、そして、東京へ戻った時だけ、遊んで貰うわけには行かないか」

その場所エツちゃんは十両二枚

目で、こいで星を残すと入幕できるところであつた。私はなんとなくエツちゃんを励まして出世させたいと思つたから、

「そうね、じゃア、今場所全勝したら、どこかへ泊りに行つてあげる」

「全勝か。全勝はつらいね」

「だつて女の気持はそんなものだわ。関取がギターかなんか巧くつ

たつて、そんなことで女は口説かれないと思うわ。関取は相撲で勝たなきやダメよ。あなたの全勝で買われたと思えば、私だつて気持ちに誇りがもてるわ」

「よし、分つた。きつと、やる。

こうなりや是が非でも全勝しなきやア」

しかし結果はアベコベだつた。

エツちゃんはそういつ気質なのだ。

励んだり、気負いたっているとき、
出はなに躓しまぬくと、ずるずると、そ
れはもう惨めとも話にならぬだら
しなさで泥沼へ落ちてしまう。初
日に負けて、いいのよ、あとみん
な勝つて下されば、二日目も負け、
いいわ、あと勝つて下されば、で
千秋楽まで、楽の日は私もとうとうと
うぶきだして、いいわ、楽に初日
をだしてよ、きつと約束まもって

あげる、けれどもダメ、つまり見事にタドンであつた。

エツちゃんには都会人らしい潔癖があるから、初日に躓いたとき、もうダメだつたので、約束通り全勝して晴れて私を抱きしめたかっただに相違ない。おなさけ、というようなことでは自分自ら納得できない気分を消し去ることができない氣質であつた。

私はしかしエツちゃんが約束通り全勝したらとても義務的なつきあいしかできなかつたと思うけれども、見事にタドンだから、いじらしくてせつなくなつた。

私はエツちゃんを励まして、共に外へでた。まだ中入前で、久須美は何も知らずサジキに坐つて三役の好取組を待っているのだが、私は急に心がきまると、久須美の

ことはほとんど心にかからず、ただタドンのいじらしさ、人間侮蔑に胸がせまって、好取組の見物なぞという久須美が憎いような気持ちまで流れた。

「私、待合や、ツレコミ宿みたい
なところ、イヤよ。箱根とか熱海
とか伊東とか、レッキとした温泉
旅館へつれて行ってちようだい。
切符はすぐ買えるルート知ってる

のよ
」

「でも僕は明日から三四日花相撲があるんだ。本場所とちがつて、こつちの方は義理があるのでね」

「じゃアあなた、あしたの朝の汽車で東京へ帰りなさい」

私はすべて予約されたことには義務的なことしかできず私の方が打ちこむことができない夕子であつたが、思いがけない窓がひら

かれ気持がにわかには引きこまれる
と、モウロウたる常に似合わず人
をせきたて有無をいわず引き廻
すような変に打ちこんだことをや
りだす。私自身が私自身にびっく
りする。女というものは、まった
く、たよりないものだ、と私はそ
んな時に考える。

温泉で意気銷沈のエツちゃんに
お酒をすすめて、そして私たちが

寢床についたとき、

「エツちゃん、今まで、ここの意
れてたわ」

「なにを？」

「ごめんね」

「なにをさ」

「ごめんねをいうのを忘れてたの

よ。ごめんなさい、エツちゃん」

「なぜ」

「だって、とても、人間侮蔑よ」

「人間侮蔑つて、何のことだい」

「全勝してちようだい、なんて、

人間侮蔑じゃないの。私、エツちゃ

んにブン殴られてもいいと思っ

たわ」

エツちゃんはわけが分らない顔

をしたが、私は私のことだけで精

いっぱいになりきるだけの夕子だ

から、

「エツちゃんもタドン苦しいの？」

平気じゃないの。私むしろとて
も嬉しいのよ。許してちょうだい
ね。私が悪かったのよ。だから、
エツちゃん」

私は両手をさしのべた。久須美
のほかの何人にも見せたことにな
い天然自然の媚態がおのずから私
のすべてにこもり、私はもはや私
のやさしい心の精であるにすぎな
かった。

翌日、エツちゃんは明るさをとりもどしていた。それは本場所のタドンよりも私との一夜の方がプラスだという考えが彼を得心させたからで、そして彼がそういう心境になっただけが、私の気分を軽快にした。

「人間侮蔑っていったね。僕が人を土俵にたたきつけるのが人間侮蔑だつてえのかい。だつて、それ

じゃア、年中負けてなきやアお氣に召さないてんじゃア」

「そうじゃないのよ」

「じゃアなんのことだい」

「いいのよ、もう。私だけの考え

ごとなんですから」

「教えてくれなきや、氣になるじやないか。かりそめにも人間侮蔑てえんだからな」

「いつでも笑われるから」

「つまり、女のセンチなんだろう」

「ええ、まア、そうよ。綺麗な海

ね。ここが私の家だったら。私、

今朝からそんなことを考えていた
のよ」

「まっただくだなア。土俵、見物衆、
巡業の汽車、宿屋、僕ら見てるの
は人間と埃ばっかり、どこへ行っ
ても附きまとっていやがるからな。
なア、サチ子さん、相撲とりが本

場所が怖くなるようじゃア、生れ
故郷の墨田川へ戻るのが怖しくつ
て憂鬱なんだから、僕はお前、こ
んなところでノンビリできりゃア、
まったく、たまらねえな」

「花相撲に帰らなくつてもいい
の？」

「フツツリよした。叱られたつて、
かまわねえ。義理人情じゃア、な
いよ。たまにゃア人間になりてえ。

オイ、見てくれ。これ、このチヨ
ンマゲ、こいつだな。人間じゃな
いてえシルシなんだ。鶏に鶏の形
があるみたいに、相撲とりの形な
んだぜ。昔はこいつが自慢の種で、
うれしかったものだけど」

私たちは米を持ってこなかつた。
エツちゃんが宿の人に頼んで一度
は食べさせてくれたけれども、ほ
んとになくて困ってるのだから、

なんとか自分で都合してくれとい
う。私が財布を渡すと、ホイきた、
とエツちゃんは立上った。

「ほんとに買える？ 当^{あて}がある
の？」

「大丈夫大丈夫」

「じゃア、私もつれて行って」

「それがいけねえワケがある。ーッ
走り行つてくるから、ちよつとの
我慢」

やがてエツちゃんは二斗のお米
と鶏四羽、卵をしこたまぶらさげ
て戻ってきて、旅館の台所へわり
こんでチャンコ料理だの焼メシを
つくって女中連にも大盤ふるまい。

「わかるかい、サチ子さん、お前
をつれて行けなかつたわけが。つ
まりこれだ、チヨンマゲだよ。こ
ういう時には、きくんだなア、お
相撲が腹がへっちやア可哀そうだ

てんで、お百姓はお米をだしてくれる、お巡りさんは見のがしてくれる、これがお前、美人をつれて遊山気分じゃア、同情してくれねえやな。アツハツハ」

「じゃア、チヨンマゲの御利益ね」
「まったくだ。因果なものだな」

夕靄にとける油のような海、岬の岸に点々と灯が見える。静かな夕暮れであつた。私はおよそ風景

を解するたちではないのだが、な
んとなく詩人みたいにシンミリし
て、だらしなく長逗留をつづける
ことになってしまった。

私の家には婆やと女中のほかに、
ノブ子さんという私の二ツ年下の
娘が同居していた。戦争中は同じ

会社の事務員だったのだが、戦災で一挙に肉親を失った。久須美の秘書の田代さんというのが、久須美から資本をかりて内職にさるマーケットへ一杯のみ屋をひらくについで、ノブ子さんが根が飲食店の娘で客商売にはあつらえ向きにできてるものだから、表向きはノブ子さんをマダムというように頼んだわけだが、まだ二十、マダムに

なつたときが十九というのだから
嘘みただけど、実際チャツカリ、
堂々と一人前以上に営業している
のである。

思いがけない長逗留で、お金が
足りなくなつたので、ノブ子さん
にたのんで秘密にお金をとどけて
貰う手筈をしたが、ノブ子さんは
田代さんと同道、温泉までお金を
とどけに来てくれた。

田代さんはノブ子さんが好きで、
一杯のみ屋のマダムは実は口実で、
ていよく二号にと考えてやりだし
たことであつたが、ノブ子さんも
田代さんが好きで表向きは誰の目
にも旦那と二号のように見えるが、
からだを許したことはない。

久須美の秘書の田代さんが来た
ものだからエツちゃんが堅くなる
と、

「イヤ、そのまま、私は天下の闇
屋です、ヤツガレ自身が元来これ
浮気以外に何事もやらぬ当人なん
だから」

実際私は田代さんが来てくれた
方が心強かった。なぜなら彼は自
ら称する通り性本来闇屋で、久須
美の秘書とはいっても実務上の秘
書はほかにあつて、彼はもっぱら
裏面の秘書、久須美の女の始末だ

の、近ごろでは物資の闇方面、そつちにかけてだけ才腕がある。彼を敵にまわさぬことが私には必要だった。

「これ幸いと一役買っついていらっ

しやったのね。ノブ子さんと温泉旅行ができるから。もっぱら私にお礼おっしやい」

「まさにその通りです。ちかごろ飲食店が休業を命ぜられて、ノブ

ちゃんは淫売しなきゃ食べないと
いう窮地に立ち至って、私の有難
味が分つたんだな。サービスがや
や違つてきたです。そこへこの一
件をききこんだから、これ幸いと
実は当地においてノブちゃんを懇ねんごろ
に口説こうというわけです。今日
あたりは物になるだろうな。ノブ
ちゃん、どうだい、この情景を目
の当り見せつけられちゃア、ここ

で心境の変化を起してくれなきゃ、私もやりきれねえな」

「ほんとにサチ子さん、すみませ
ん。私ひとり、お金をとどけるつ
もりだったけど、私、一存で田代
さんに相談しちゃったのよ。だっ
て心配しちゃったのよ、このまま
放っついて、あとあと……」

私もノブ子さんがこづいてくれ
ることを予想していたのであった。

ノブ子さんは表面ひどくガツチ
リ、チャツカリ、会社にいたころ
も事務はテキパキやっつてのけるし、
飲み屋をやっつてからも婆やを手伝
いにつけてあるのに、自転車で買
いだしにでる、店のお掃除、人手
をかりずに一人で万事やる上に、
向う三軒両隣、近所の人のおぶんま
でついでに買いだしてやったり、
隣りの店の人が病気でシヨウバイ

ができず、さりとて寝つけば食べるお金にも困るといって、するとノブ子さんは自分の店の方をやめて、隣の店で働いてやるといって、女には珍しい心の娘であった。

だから活動的で、表面ガツチリズムの働き者に見えるけれども、実際はもうからない。三角クジだの宝クジだの見向きもしたことなく、空想性がなく着実そのもの

だけれども、人の事となると損得
忘れてつくしてやって一銭ずつの
着実なもうけをとたんにフイにし
てしまう。

田代さんはノブ子さんの美貌と
活動性とチャツカリズムに目をつ
けて、大いにお金をもうけるつも
りでかかったのに、一向にもうけ
もなく、おまけにノブ子さんは売
上げの一割は手をつけずにおいて、

自分の方にもうけがなくとも、この一割だけは田代さんの奥さんへとどけてやる。万事万端意想外で田代さんは呆気にとられたが、この人がまた、金々々、金が欲しくて堪らない、金のためなら何でもするという御人のくせに、御目当の金の蔓、しかし営業不成績をあきらめて、ノブちゃんの純情な性質の方をいたわった。

「しかしノブちゃん、からだぐら
い、処女をまもるなんて、つまら
ねえな、そんなこと。私の女房に
悪いから、なんて、ねえ奥さん

（彼は私をこうよんだ）人間は本
性これ浮気なものだから、かりそ
めに男を想う、キリスト曰く、こ
れすでに姦淫です。心とからだは
同じことだよ。からだだけはなん
て、そんな贗物はいけねえな。だ

から奥さんを見習え、てんだ。奥さんは浮気、からだ、そんなこと、てんで問題にもしていいえ。だからまた、うちのオヤジと奥さんとは浮気の及ばざる別のつながりがありうることになるのだな。このところを見なきやア。からだにこだわったんじやア、だからノブちゃんは大学生だのチンピラ与太者に崇拜されたりなんかして、そ

ういうクダラナサが分らねえのだ
から切ないよ。どうしてこう物の
道理が分らねえのか、ねえ、奥さ
ん」

田代さんがノブ子さんを私のと
ころへ同居させたのも、なんとか
して私の浮気精神をノブ子さんに
伝授させたい念願だから、特別私
の目の前でせつせと口説くけれど
も、私は笑って見物、助太刀して

あげたことがない。

「奥さん、ノブちゃんの心境を変えようになんとか助けて下さいな」

「だめ。口説くことだけは独立独立歩でなければだめよ」

「友情がねえな、奥さんは。すべてこの紳士淑女には義務があるです。それは何かてえと友の恋をとりもつてえことですよ。私が女を

つれて友だちに会う。するてえと、
私は友達よりも私の方が偉いように
に威張り、また、りきむです。こ
れ浮気の特権ですな。したがって
また友だちが女をつれて私の前へ
現れたときは、私は彼の下役であ
り、また鈍物であるが如く彼をも
ちあげてやるです。これを紳士の
教養と称し義務と称する、男女も
また友人たるときは例外なくこの

教養、義務の心掛がなきや、これ
実に淑女紳士の外道だなア。奥さ
んなんざア、天性これ淑女中の大
淑女なんだから、私がいわなくつ
とも、なんとかして下さるはずな
んだと思うんだけどな」

ノブ子さんには大学生が口説い
たりつけぶみ附文したり、マーケットの相
当なアンちゃん連が二三人これも
口説いたり附文したり、何々組の

ダンスパーティーなどと称して踊り
を知らないノブ子さんを無理につ
れて行くから、田代さんのヤキモ
キすること、テゴメにされちゃア、
あの連中、やりかねねえから、な
どと帰ってくるまで落着かない。
からだなんざアとか、処女なんて、
とかいつてるくせに、案外そうで
もないらしいから、私がからかっ
てあげる。それは、あなた、だっ

て、なにも、下らなく傷物になる
ことはないからさ、誰だつてあな
た、好きな人が泥棒強盗式みてえ
に強姦されたんじやア、これは寝
ざめが悪いや。かほど熱心に口説
いているけど、ノブ子さんはウン
といわない。けれども田代さんが
好きなのである。

私と全然似てもつかないノブ子
さんは、私のもろい性質、モウロ

ウたるたよりなさを憐れんで、私よりも年上の姉さんのように心配してくれた。しかし実際は表面強気のノブ子さんが実際は自分の行路に自信がなくて、営業のこと、恋のこと、日常の一事に迷い、ぐらつき、薄氷を踏むようにして心細く生きているのを私は知りぬいており、私は無口だから優しい言葉なんかで、いたわってあげるこ

とはないけれども、身寄りのない
ノブ子さんは私を唯一の力にして
もいた。

「奥さん、しかし、まずかったな。
浮気という奴は、やっぱり、誰に
も分らないようにやらなきゃダメ
なものですよ。しかし、こいで短
気を起しちゃ、尚いけない。それ
が一番よくないのだから、何くわ
ぬ顔で帰ること。そして、なんだ

な、関取と泊った、そこまでは分つ
ているから仕方がないが、一緒に
泊ったが、関係はなかった、いい
ですか、こいつをいい張るのが何
よりの大事です。いい張って、い
い張りまくる、疑りながらも、やっ
ぱりそうでもねえのかな、と、人
間てえものは必ずそう考える動物
なんだから、徹頭徹尾、関係はな
かった、そういい張っていいりゃア、

第一御本人までそう思いこんでしまつようなものでさア。分りましたか」

しかし田代さんは私のことよりも自分のことの方が問題なのだ。

ノブ子さんは田代さんと同じ部屋へ寝るのが厭だといつたのだが、

田代さんはさすがにいくらか顔色を変えて、ノブちゃん、そりゃアいけない。そこまで私に恥をかか

しちゃんいけないよ。旅館へあなた
男女二人できて別の部屋へ泊るな
んて、そりゃアあなた体裁が悪い、
これぐらい羞かしい思いはないよ。
同じ部屋へねたつて、それは私は
口説きますよ、口説きますけど、
暴力を揮いやしまいし、そういう
信用は持つてくれなきや、そこま
で私に恥をかかしちゃ、まるで、
ノブちゃん、それじゃア私が人格

ゼロみたいのものじゃないか。

男たちが温泉につかっていると
き、ノブ子さんは私に、

「どっしたらいいかしら。田代さ
んを怒らしてしまっただけど、つら
いのよ。寢床の中で口説かれるな
んて、第一私男の人に寝顔なんか
見せたことないでしょう。寢床の
中で口説かれるなんて、そんなこ
と、私田代さんに惨めな思いさせ

たり惨めな田代さん見たくないから、許しちゃうかも知れないのよ。そんな許し方したら、あとあと侘しくて、なさけないじゃないの。そうでしょう。だから、いつそ、私の方から許してしまったら。なんだが、ヤケよ。サチ子さん、どうしたらいいの。教えてちょうだい」

「私には分らないわ。あんまりた

よりにならなくて、ノブ子さん、
怒らないでね。私はほんとに自分
のことも何一つ分らないのよ。い
つも成行にまかせるだけ。でも、
ほんとに、ノブ子さんの場合は、
どうしたらいいのかしら」

「ヤケじゃアいけないでしよう」
「それは、そうね」

その晩の食卓で私は田代さんに
いった。

「田代さんほどの人間通でもノブ子さんの気持がお分りにならないのね。ノブ子さんは身寄りがないから、処女が身寄りのようなものなのでしよう。その身寄りまでなくしてしまうとそれからはもう闇の女にでもなるほかに当のないような暗い思いがあるものよ。私のような浮気っぽいモウロウたる女でも、そんな気持がいくらかある

ほどですもの、女は男のように生活能力がないから、女にとっては貞操は身寄りみたいなものなんでしょう、なんとなく、暗いものなのよ。ですから、ノブ子さんのただ一つの身寄りを貰うためでしたら、身寄りがなくとも暮せるような生活の基礎が必要でしょう。前途の不安がないだけの生活の保証をつけてあげなくては。口約束じゃ

アダメ。はつきり現物で示して下さらなくては」

「それは無理ムタイという奴だな奥さん。それはあなたは、あなた
の彼氏は天下のお金持だから、だ
けど、あなた、天下無数の男とい
う男の多くは全然お金持ではない
のだからな。処女というものを芸
者の水揚げの取引みたいに、それ
は、あなた、むしろ処女の侮辱だ

な。むろん、あなた、私はノブちゃんを大事にしますよ。今、現に、私がノブちゃんを遇する如くに、です。それ以外に、あなた、水揚料はひでえな」

「水揚料になるのかしら。それだつたら、私もタダだつたわ」

「それ御覧なさい。それはあなた、処女は本来タダですよ」

「私の母が私の処女を売り物にす

るつもりだったから、私反抗し
ちやっただのよ。でも、今にして思
えば、もし女に身寄りがなかった
ら、処女が資本かも知れなくつて
よ。だって芸者は水揚げしてそれ
から芸者になるのでしょう。私の
場合は、処女というヨリドコロを
失うと闇の女になりかねない不安
やもろさや暗さに就ていうのです。
ですから処女をまもるのは生活の

地盤をまもるのよ」

「かつて見ざる鋭鋒だな。奥さんが処女について弁護に及ぶとは、女は共同戦線をはるてえと平然として自己を裏切るからかなわねえなア。共同の目的のためというのにはストライキの原則だけど、己を虚しうし、己を裏切るてえのは、そんなストライキはねえや。それはあなた、処女が身寄りのような

ものだてえノブちゃんの心細さは
分りますとも。けれどもそんな心
細さはつまりセンチメンタリズム
てえもので、根は有害無益なる妖
怪じみた感情なんだなア。処女ひ
とつに女の純潔をかけるから、処
女を失うてえと全ての純潔を失っ
てしまう。だから闇の女になるで
すよ。けれどももあなた純潔なるも
のはそんなチャチなものじゃない。

魂に属するものです。私は思うに
日本の女房てえものは処女の純潔
なる誤れる思想によつて生みなさ
れた妖怪的性格なんだなア。もう
純潔がないのだから、これ実に妖
怪にして悪鬼です。金銭の奴隷に
して子育ての虫なんだな。からだ
なんざアどうだつて、亭主の五人
十人取りかえたつて、純潔てえも
のを魂に持つてなきやア、ダメで

すよ。そこへいくとサチ子夫人の如きは天性でんでからだなんか問題にしていな人なんだから、そしてあなた愛情が感謝で物質に換算できるてえのだから、自ら称して愛情による職業婦人だということだから、これは天晴れ、胸のすくような淑女なんだな。そのあなたが、こともあろうに、いけません、同情ストライキ、それはいけない。

あなたはあなたでなきやアいけな
い。関取、そうじやないか、サチ
子夫人がかりそめにも浮気の大精
神を忘れて、処女の美德をたたえ
るに至っては、拙者はあなた、こ
んなところへワザワザ後始末に来
やしませんや。私はあなたサチ子
夫人を全面的に尊敬讚美しその性
向行動を全面的に認める故に犬馬
の労を惜しまぬのです。かかる熱

誠あふるる忠良の臣民を歎かせちや
アいけねえなア」

田代さんの執念があまり激し
ぎるので、楽な気持になれない。

私だったらノブ子さんとは違った
意味で許す気持にならないけれど
も、ノブ子さんは田代さんを愛し
もし尊敬もしているのだから、処
女ぐらいに、ああまでエゴジに守
るのが私には分らない。私は実際

は、こんなこと、ただうるわいの
だ。

その夜、田代さんたちが別室へ
去ってから、

「え、サチ子さん。ノブ子さんは
可哀そうじゃねえのかな」

「なぜ」

「だってムツツリ、シヨンボリ、
考えこんでいたぜ。イヤなんだろ
「う」

「仕方がないわ。あれぐらいのこと。いろいろなことがあるものよ、女が一人でいれば」

「ふーん。いろいろなことって、どんなこと」

「いろんな人が、いろんなふうに口説くでしょう」

「そういうものかなア。僕なんざ、めったに口説いたことも口説かれなこともないんだがな。だけど、

あれぐらいムツツリと思いつめて
考えてるんじゃないア」

「あなただって私をずいぶん悩ま
したじゃないの」

「なるほど、そうか。そして結局
こんなふうになるわけか」

「罰が当るって、なによ」

「なんだい？ 罰が当るって」

「いつか、あなた、いったでしょ
う。オメカケが浮気してロクなこ

とがあつたタメシがないんだつて。
罰が当るんだつて。罰が当るつて、
どんなこと?」

「そんなことをいつたかしら。覚
えがねえな。だつて、お前、お前
は別だ」

「なぜ。私もオメカケの浮気です
もの」

「お前は浮気じゃないからな。心
がやさしすぎるんだ」

「たいがいのオメカケがそうじゃないの？」

「もう、かんべんしてくれ。僕はしかし、お前を苦しめちゃアいけねえから、フツツリ諦めよう。これからはもう相撲いちずにガムシヤラにやってやれ。しかし、お前のこと pensando しないでさずに、そんなことができるかな」

「私は思いださない」

「僕がもうそんなに何でもないので
か」

「思いだしたって、仕方がないで
しょう。私は思いだすのが、きら
い」

「お前という人は、私には分らな
いな」

「あなたはなぜ諦めたの？」

「だつてお前、僕は貧乏なウダツ
のあがらねえ下ツパ相撲だからな。

お前は遊び好きの金のかかる女だから

「諦められる」

「仕方がねえさ」

「諦められるなら、大したことないでしょう。むろん、私も、そう。だから、私は、忘れる」

「そういうものかなア」

「つまらないわね」

「何がさ」

「こんなことが」

「まったくだな。味気ねえな。僕

はもう生きるのも面倒なんだ」

「そんなことじゃアないのよ。私

は生きてることは好きよ。面白そ

うじゃないの。また、なにか、思

いがけないようなことが始まりそ

うだから。私は、ただ、こんなこ

とがイヤなのよ」

「こんなことって?」

「こんなことよ」

「だから」

「しめっばいじゃないの。ない方が清潔じゃないの。息苦しいじゃないの。なぜ、あるの。なければならぬの。なくて、すまないことなの？」

エツちゃんは答えなかつたが、ノツソリ起きて、閉じられた雨戸をあけて庭下駄を突ツかけて外へ

でて行つた。闇夜なのだか月夜なのだか、私は外のことなど見も考
えもしなかつたが、エツちゃんは
程へて戻つてきて私の胸の上へ大
きな両手をグイとついた。力をい
れたわけではないのだらうけど、
私はウツと目を白黒させたまま虚
脱のてい、エツちゃんは私の肩に
グイと手をかけて掴み起して、
「オイ、死のう。死んでくれ」

「いや」

「もう、いけねえ、そうはいわせねえから」

私はいきなり軽々と掴みあげられ、担がれてしまった。私はやにわに失神状態で、何の抵抗もなくヒヨイと肩へ乗せられてしまったが、首ったまにかじりつくくと、何だかわけの分らないような一念が起つて、

「いいの、私は悲鳴をあげるから、
人殺しツて叫ぶから、それでもいいの」

雨戸を押しひろげるためにガタガタやるうち片手を長押なげしにかけて、

「我を通すのは卑怯じゃないの。」

私は死ぬことは嫌いよ。そんな強要できて？ 死にたかったら、なぜ、一人で死なないの」

エツちゃんは、やがて蒸気によ

うな呻き声をたてて、私を雨戸の
旁へ降して、庭下駄はいて外の闇
へ歩き去った。私は声をかけなかつ
た。

私は眠るときでも電燈を消すこ
とのできない生れつきであつた。

戦争中でも豆電球をつけなければ
眠られぬたちで、私は戦争で最も
嫌いなのは暗闇であつた。光が失
われると、何も見えないからイヤ

だ。夜中に目がさめて電燈が消えていると、死んだのか、と慌てる始末であつた。私はつまり並外れて死ぬことを怖がるたちなのだろう。

五分ぐらいすぎて、私は次第に怖しくなつた。外には何の気配もなかつた。ノブ子さんの部屋へ行くと二人はまだ眠らずにいたが、事情を話してノブ子さんの布団の

中でねむらせてもらおうとした。

「じゃア関取はまだ戻らないんで

すね」

「ええ」

「自殺でもしたのかな」

「どうだか」

「うむ、どうでもいいさ」

田代さんはノブ子さんを相手に

持参のウイスキーを飲みはじめた

が、私は先に眠ってしまった。痺

れるように、すぐ眠った。

夏がきて、私たちは海岸の街道筋の高台の旅館で暮した。借りた離れは湯殿もついて五間の独立した一棟で、久須美と田代さんは殆どここから東京へ通い、私とノブ子さんは昼は海水浴をたのしんだ。

私は毎日七時半頃目がさめる。

食事して、久須美を送りだすのが九時ころ、それから寝ころんで雑誌を三四頁よむうちに眠くなり、うとうとして十一時か十一時半ころ目がさめる。昼の食欲は殆どない。ときどき、無性にアイスクリームが欲しい、サイダーが欲しい、冷めたいコーヒーが欲しい。うたたねの夢にそれを見ていることも

ある。中食後海へ行き四時ごろ帰つてきて風呂にはいり、ついでに洗濯物をしたり、それから寝ころんで雑誌をよみだすと、また、うとうとねむってしまふ。久須美が帰ってきて、その気配でたいがい目がさめる。夕方になっている。海がたそがれ、暮れようとしている。私は海をしばらく見ている。久須美が電燈をつけると、もう

ちよつと、あかりをつけないで、
という。しばらくして、もうつけ
ていいわ、という。私は顔を洗い、
からだをふき、お化粧を直し、着
物を着かえて、食卓に向う。あか
るい灯と、食卓いっぱい御馳走
が私の心を安心させ、ふるさとへ
帰ったような落ち着きを与えてくれ
る。私はオチヨウシを執りあげて
久須美にさし、田代さんにさす。

私は私がたべるよりも、人々がたべ、また、私が話すよりも、人々の話のはずむのがたのしい。

私はこのごろ時々よけいなことを喋るのでイヤになることがある。物を貰ったりすると、ありがとう、ございます、などといったりする。以前はニツコリするだけだった。

季節に珍しい物を貰うと、今ごろ珍しいわね、などと自然に喋って

いたり、それだけなら私は別に喋
るのがイヤではないけれども、好
ましくないものを貰うと、ありが
とう、とうけれども、そしてニッ
コリしているけれども、ずいぶん
冷淡な声なのである。私の母は嬉
しいものを貰うと大喜びをするけ
れども、無関心なただき物には、
ソツポを向くような調子であつた。
子供心にそれが下品に卑しく見え

て、母の無智無教養ということをして、呪っていた。以前の私はいつもニッコリ笑うだけだからよかつたけれども、近ごろは有難うなぞと余計なことを自然にいうようになったから、ありがとうございます、といたり、ありがとうございます、といったり、言葉や声に自然の区別があつて、なければ余程マシなような冷淡な声をだしたりするから、ふと

母の物慾、その厭らしさを思いだしてゾツとするのだ。

私は自分で好きなものを見立てて買い物をするよりも、好きな人が私の柄にあうものを見立てて買ってきてくれるのが好きだった。一緒に買い物にでて、あれにしようか、これにしようか、一々私に相談されるのはイヤ、自分でこれときめて、押しつけてくれる方がう

れしい。着物や装身具や所持品は私の世界だから、私自身が自分で選ぶと自分の限定をはみだすことができないけれども、人が見立ててくれると新しい発見、創造があり、私は新鮮な、私の思いもよらない私の趣味を発見して、新しい自分の世界がまた一つ生れたように嬉しくなる。

久須美はそういう私の気質を知っ

ていた。彼の買い物の選択はすぐ
れていて、その選択の相談相手は
田代さんであった。私は私の洋服
まで、私が柄や型を選ぶよりも、
久須美にしてもらう方が好ましい。
洋装店にからだの寸法がひかえて
あるから、思いがけない衣裳がと
どいて、私はうつとりしてしまう。
田代さんやノブ子さんのいる前で
すら、私は歓声をあげて自然に久

須美にとびついてしまう。

私は朝目がさめて久須美を送りだすまでの衣裳と、昼の衣裳と、夜の衣裳と、外出しなくとも、いつも衣裳をかえなければ生きて気持になれなかった。うとうとと昼寝の時でも気に入りの衣裳をつけていなければ安心していられなかった。美しい靴を買ってもらおうと、それをはいて歩きたいばかりに、

雨の降る日でも我慢ができずに一
廻り散歩にでかけずにいられなく
なる。まして衣裳類はむろんのこ
と、帽子でもハンドバッグ一つで
も、その都度一々私は意味もなく
街を歩いてくるのであった。映画
や芝居の見物よりも私にとって最
もうれしい外出はその散策で、私
は満足した衣裳を身にまとうとき、
何より生きがいを感じることで

きた。

私はその生きがいを与えてくれる久須美に対してどのような感謝を表現したらいいか、そのことで最も心を悩ました。私の浮気もいわば私の衣裳のよろこびと同じ性質のもので、だから私が浮気について心を悩ますのは帽子や衣裳や靴と違って先方に意志や執念があることであり、浮気自体にうしろ

めたさを覚えたことはなかったが、私はこの浜で、大学生やヨタモノみたいな人や闇屋渡世の紳士やその他のお茶によばれたり散歩やダンスに誘われたが、私はいつも首を横にふつてことわった。そのとき私はそんなことをしては久須美に悪いと考えた。そして浮気をしないのが、久須美に対する感謝の一つの表現だと考えた。その考えは

なんとなく世帯じみたようでイヤ
であつた。私は母に義理人情をい
われるたびに不快と反抗を感じ、
母の無智を憎んだけれども、私も
おのずから世帯じみて自然のうち
に義理人情の人形みたいに動くよ
うになつているのが不快であり、
私はまた、母の姿を見出して時々
苦しかつた。

私はしかし浮気は退屈千万なも

のだということを知っていた。しかし、退屈というものが、相当に魅力あるものであり、人生はたかがそれぐらいのものだとも思っていた。私は久須美が痩せているくせに肩幅がひろくそこの骨がひどくガツシリしており肋骨が一つ一つハッキリ段々になっている、腰の骨がとびだし、お尻の肉が握り拳ぐらいに小さく、膝の骨だけと

びだして股の肉がそがれたように
細くすぼまり脛には全くふくらみ
というものが失われてガサガサし
た棒になっている、その六尺の長
い骨格を上から下、下から上、そ
んなものをぼんやり眺めていても、
私は一日、飽かずくらしでいられ
る。時にはそれが人体であり肋骨
の段々であることも忘れて、楽器
と遊ぶように指先で骨と凹みをつ

ついたり撫でたり遊んでいる。私
はまた、ねころびながら小さな鏡
に私の顔をうつして眺めて、齒や
舌や喉や、肩やお乳など眺めてい
ても、一日を暮すことができる。

私は退屈というものが、いわば一
つのなつかしい景色に見える。箱
根の山、蘆の湖、乙女峠、いった
い景色は美しいものだろうか。も
し景色が美しければ、私には、そ

れは退屈が美しいのだ、と思われ
る。私の心の中には景色をうつす
美しい湖、退屈という湖があり、
退屈という山があり、退屈という
森林があり、乙女峠に立つときに
は乙女峠という景色で、蘆の湖を
見るときは蘆の湖の姿で、私は私
の心の退屈を飯の景色にうつしだ
して見つめているように思いつく。

「私の可愛いオジイサン、サン

タクロース」

私は久須美の白髪をいじりいたわりつつ、そういう。しかし、また、

「私の可愛い子供、可愛いア
イスクリム、可愛いチツちゃ
な白い靴」

久須美は疲れてグツスリねむった。しかし五六時間で目がさめて、起きてぼんやり私の寝顔を眺めて

おり、夜がしらじら明けると、雨戸をあけて、海を眺めている。私はしかし、どっぴしてこんなに眠ることができると。いつでも、いくらでも、私は殆ど無限に眠ることができると。ふふと目をさます。久須美が起きて私をぼんやり見つめている。私は無意識に腕を差しだしてニッコリ笑う。久須美は呆れたように、しか

し目をいくらか輝かせて、静かに
「っ、うなずく。」

「何を考えているの？」

彼は答える代りに、私の額や眼
蓋のふちの汗をふいてくれたり、
時には襟へ布団をかぶせてくれた
り、ただ黙って私を見つめていた
りした。

私がノブ子さん田代さんに迎え
られエツちゃんとは別れて温泉から

帰ってきたとき、私は汽車の中で発熱して、東京へ戻ると数日寝ついてしまった。見舞いにきた登美子さんはあなたの中から魔法的ね、いい訳に苦しむ時には都合よく熱まででるように、九度八分ぐらいの熱まで調節できるんだからな、天性の妖婦なのね、などと私の枕元でズケズケいうのだが、私はいいい訳に苦しむ気持などは至っ

て乏しくて、第一私はいいい訳に苦しむよりも病気の方がもつと嫌いなのだもの、誰が調節して九度八分の熱をだすものですか。しかし、私が熱のあいまにふと目ざめると、いつも久須美が枕元に、私の氷嚢をとりにかえてくれたり、汗をふいてくれたり、私は深い安堵、それはいいい訳を逃れた安堵ではなくて心の奥の孤独の鬼と闘い私をまもっ

てくれる力を見出すことの安堵、
私が無言で私の二つの腕を差しの
ばすと、彼はコックリうなずいて、
苦しくないか？ 彼の目には特別
の光も感情も何一つきわだつもの
の翳もないのに、どうして私の心
にふかく溶けるように沁みてくる
のだろうか。私が彼の手を握って、
ごめんね、というと、彼の目はやっ
ぱり特別の翳の動きは見られない

のに、私はただ大きな安堵、生きて
いるというそのこと自体の自覚
のようなひろびろとした落着きに
酔い痴れることができた。

そのくせ彼はこの海岸の旅館へ
きて、急に思いついたように、

「墨田川が好きで忘れられないな
ら、私が結婚させてあげる。相当
のお金もつけてあげるよ」

「そんなことを、なぜいつの」

「好きじゃないのか？」

「好きじゃない。もう、きらい」

「もう嫌いというのが、わからな
いな」

「ほんとは。もう苦しめないで。
私は浮気なんか、全然たのしくな
いのです」

「だがな、私のような年寄が。私
なら、君のようについていこうとができ
る。しかし君のような若い娘がそ

んなふうについて、私には信じることが本心に好きだから、私は君の幸福をいわずにいられない。私のようなものに束縛される君が可哀そうになるのだよ」

「あなたの仰有るおっしゃことの方が私にはわからないわ。好きだから、ほかの人と結婚しろなんて、嘘でしょう。ほんとは私がうるさくなっ

のでしょひ」

「そうじゃない。いつか君が病気に
なつたことがあつた。君は気が
つかなかつたが、君は眠ると寝汗
をかく、そのうちに、目のふちに
薄い隈がかかつてきたが、ねむる
とハッキリするけれども目をひら
くと分らなくなるので、君は気が
つかなかつたんだな。いくらか目
のふちがむくんでもいた。その寝

顔を眺めながら、私はそのとき心
の中でもう肺病と即断したものだ
から、君が病み衰えて痩せ細って
息をひきとる姿を思い描いて、そ
れを見るぐらいなら私が先に死に
たいと考え耽っていたものだった。
私自身はもう私の死をさのみ怖れ
てはいない。それはもう身近かに
迫っていることでもあるから、私
は死をひとつの散歩と思っぐらい、

かなり親しい友達にすらなっていないのだ。しかし、君は違う。私のような年配になると、人間世界を若さの世界、年寄の世界、二つにハッキリ区別する年齢的な思想が生れる。私自身若かったころは殆どもう若々しいところがなくて孤独癖、ときには厭人癖、まことにひねこびた生き方をしており、私に限らずなべて若者の世界も心中

概ね暗澹たるもののように察して
いるが、私はしかしある年齢の本
能によつて限りなく若さをなつか
しむ。慈しむ。若さは幸福でなけ
ればならないと思う。若者は死ん
ではならぬ。ただ若さというもの
に対してすでにそのような本能を
もつ私が、私の最愛の若い娘に対
して、どのような祈りをもってい
るか、その人の幸福のために私自

身の幸福をきり放して考えることが微塵も不自然でないか……」

久須美は私のために妻も娘も息子もすてたようなものだった。なぜなら彼は、もはや自宅ではなしに私たちの海岸の旅館へ泊りそこから東京へ通っているのだから。

人々はそのような私たちをどんな風にいうだろうか？ 私が久須美をだましたというだろうか。恋に盲^{めし}

いた年寄のあさましい執念狂気を
思い描くことだろう。

私はしかしそんなことはなんと
も思っていない。息子や娘にとつ
て、親なんか、なんでもないでは
ないか。そして親が恋をしたって、
それはやむを得ぬこと、なんでも
ないことだと私は思う。久須美も
そんなことは気にしていなかった。
私は知っている。彼は恋に盲いる

先に孤独に盲いている。だから恋に盲いることなど、できやしない。彼は年老い涙腺までネジがゆるんで、よく涙をこぼす。笑つても涙をこぼす。しかし彼がある感動によつて涙をこぼすとき、彼は私のためでなしに、人間の定めのために涙をこぼす。彼のような魂の孤独な人は人生を観念の上で見ても、自分の今いる現実すらも、観

念的にしか把握できず、私を愛しながらも、私をでなく、何か最愛の女、そういう観念を立てて、それから私を現実をとらえているようなものであった。

私はだから知っている。彼の魂は孤独だから、彼の魂は冷酷なのだ。彼はもし私よりも可愛い愛人ができれば、私を冷めたく忘れるだろう。そういう魂は、しかし、

人を冷めたく見放す先に自分が見放されているもので、彼は地獄の罰を受けている、ただ彼は地獄を憎まず、地獄を愛しているから、彼は私の幸福のために、私を人と結婚させ、自分が孤独に立去ることをそれもよかろう元々人間はそんなものだというぐらいに考えられる鬼であつた。

しかし別にも一つの理由がある

はずであつた。彼ほど孤独で冷めたく我人^{われひと}ともに突放している人間でも、私に逃げられることが不安なのだ。そして私が他日私の意志で逃げることを怖れるあまり、それぐらいなら自分の意志で私を逃がした方が満足していられると考える。鬼は自分勝手、わがまま千万、途方もない甘ちゃんだった。そしてそんなことができるのも、

彼は私を、現実をほんとに愛しているのじゃなくて、彼の観念の生活の中の私は、ていのよいオモチャの一つであるにすぎないせいでもあった。

田代さんはこの旅館へきてノブ子さんと襖を距てて生活して、いまだに目的を達することができずにいた。田代さんは三日目ぐらいに自宅へ泊る習慣で、その翌日は、

きのうは私の奥さんを可愛がって
やってきました、などということさら
吹聴したが、田代さんの通人哲学、
浮気哲学はヒビがはいつているよ
うだ。田代さんは人間通で男女道、
金銭道、欲望道の大達人の如くだ
けれども、田代さんはこれまで芸
者だの商売女ばかりを相手にして
娘などは知らないのだから、私み
たいな性本来モウロウたるオメカ

ケ型の女でもなければ自分の方から身をまかせるように持ちかける女などはめったにないことを御存知ないのだ。女はどんな好きな人にも、からだだけは厭だという、厭ではなくても厭だという、身をまかせたくて仕方がなくとも厭だといって無理にされると抵抗するような本能があり、私でもやっぱり同じ本能があつて、私はしか

しそれを意識的に抑えたただけのこと
とで、私はそんな本能はつまらな
いものだと思っっている。女は恋人
に暴行されたいのだ。男はその契
りのはじめにおいて暴行によつて
愛人のからだに感謝を受けの特権
があるということ、田代さんは相
談ずくの商売女しか御存知ないか
ら、それに田代さんは通人、いわ
ゆる花柳地型の粹人だから、ずい

ぶん浮気性だけれども、愛人が厭
だといひ抵抗するのを暴行強姦す
るなんてそんなことはやるべから
ざる外道だと思つてゐる。そして
十年一日の如くノブ子さんを口説
きつづけにゐるのだけれども、た
ぶん暴行によらない限り二人の恋
路はどうすることもできないのだ
ろう。私はバカバカしいから教え
てあげない。そして時々ふきだし

そうになるけれども、田代さんは
シンミリして、「いったいノブちゃ
ん、君は肉体的な欲求というもの
を感じないのかなア。二十にもなっ
て、バカバカしいじゃないか」

そしてムツツリ沈黙しているノ
ブ子さんを内心は聖処女ぐらいに
尊敬し、そしてともかくノブ子さ
んの精神的尊敬を得ていることを
内心得意に満足していた。

けれどもノブ子さんは肉体的欲求などは事実において少いのだから、別なことで苦しんでいる様子であつたが、それは嘗々と働いて自分の生活はきりつめて儉約しながら、人のために損をする、それを金々々、金銭の奴隷のようなことをいう田代さんが、いいのだよノブちゃん、それでいいのだ、という。しかし実際それでいいのか、

自分の生活をきりつめてまでの所得を浪費して、そして人を助けて果して善行というのだろうか、疑ぐっているのであった。

ノブ子さんはともかく田代さんや私たちがついていいるから損をしても平気だけれども、独立したら、こんな風でやって行けるかと考えて苦しんでいるので、実行派のガツチリ家、現実家だから、その懊惱

は真剣であつた。

「女が自分で商売するなんて、サ
チ子さん、まちがつてるんじゃない
いかしら。私、このまま商売をつ
づけて行くと、人に親切なんかで
きなくなつて、金銭の悪魔になる
わよ。そうしなきゃ、やつて行け
ないわよ」
「そうね」

私は生返事しかできないのであ

る。ノブ子さんの懊悩は真剣で、
実際その懊悩通りに金銭の悪鬼に
なりかねないところがあつたが、
私はしかしノブ子さんその人でな
しに、その人の陰にいる田代さん
のガツチリズムの現実家、ころん
でもタダは起きないくせに、実は
底ぬけの甘さ加減がおかしくて仕
方がないのだ。人生はままならね
エもんだなア、と田代さんはいう

けれども、私もそれは同感だけれども、田代さんが感じる如くにま
まならネエかどうが、田代さんは
人間はみんな浮気の虫、金銭の虫、
我利の虫だといいきるくせに、そ
の実ノブ子さんを内々は聖処女、
我利我利ズムのあべこべの珍しい
氣象の娘だなどと、なんてまたツ
ジツマの合わない甘ったれた人な
んだか私はハリアイがぬけてしま

う。

私は野たれ死をするだろうと考
える。まぬかれがたい宿命のよう
に考える。私は戦災のあとの国民
学校の避難所風景を考え、あんな
風な汚ならしい赤鬼青鬼のゴチャ
ゴチャしたなかで野たれ死ぬなら、
あれが死に場所というのなら、私
はあそこでいつか野たれ死をして
もいい。私がムシロにくるまっ

死にかけているとき青鬼赤鬼が夜
這いにきて鬼にだかれて死ぬかも
知れない。私はしかし、人の誰も
いないところ、曠野、くらやみの
焼跡みたいなところ、人ツ子一人
いない深夜に細々と死ぬのだった
ら、いつたいどうしたらいいだろ
うか、私はとてもその寂寥には堪
えられないのだ。私は青鬼赤鬼と
でも一緒にいたい、どんな時にで

も鬼でも化け物でも男でさえあれば誰でも私は勢いっばい媚びて、そして私は媚びながら死にたい。

わがままいっばい、人々が米もたべられずオカユもたべられず、豆だの雑穀を細々たべているとき、私は鶏もチーズもカステラも食べあきて、二万円三万円の夜服をつくってもらって、しかし私がモウロウと、ふと思うことが、ただ死、

野たれ死、私はほんとにただそれだけしか考えないようなものだった。

私は虫の音や尺八は嫌いだ。あんな音をきくと私はねむれなくなり、ガチャガチャうるさいトロツトなどのジャズバンドの陰なら私は安心してねむくなるたちであつた。

「まだ眠むつちゃ、いゃ」

「なぜ」

「私が、まだ、ねむれないのです
もの」

久須美は我慢して、起きあがる。
もうこらえ性がなくて、横になる
と眠るから、起きて坐って私の顔
を見ているけれども、やがて、コ
クリコクリやりだす。私は腕をの
ばして彼の膝をゆさぶる。びっく
りして目をさます。そして私がニッ

コリ下から彼を見上げて笑っているのを見出す。

私は彼がうたたねを乱される苦しさよりも、そのとき見出す私のニツコリした顔が彼の心を充たしていることを知っている。

「まだ、ねむれないのか」

私は頷く。

「私はどれぐらいウトウトしたのかな」

「二十分ぐらい」

「二十分か。二分かと思ったがな
ア。君は何を考えていたね」

「何も考えていない」

「何か考えたらろう」

「ただ見ていた」

「何を」

「あなたを」

彼は再びコクリコクリやりだす。

私はそれをただ見ている。彼はい

つ目覚めても私のニッコリ笑っている顔だけしか見ることができないだろう。なぜなら、私はただニッコリ笑いながら、彼を見つめているだけなのだから。

このまま、どこへでも、行くがいい。私は知らない。地獄へでも。私の男がやがて赤鬼青鬼でも、私はやっぱり媚をふくめていつもニッコリその顔を見つめているだけだ

ろう。私はだんだん考えることが
なくなっ て行く、頭がカラになっ
て行く、ただ見つめ、媚をふくめ
てニッコリ見つめている、私はそ
れすらも意識することが少くなっ
て行く。

「秋になったら、旅行しよう」

「ええ」

「どこへ行く?」

「どこでも」

「たよりない返事だな」

「知らないのですもの。びっくりするとところへつれて行ってね」

彼は頷く。そしてまたコクリコクリやりだす。

私は谷川で青鬼の虎の皮のフンドシを洗っている。私はフンドシを干すのを忘れて、谷川のふちで眠ってしまった。青鬼が私をゆさぶる。私は目をさましてニッコリする。

る。カツコウだのホトトギスだの
山鳩がないている。私はそんなも
のよりも青鬼の調子外れの胴間声
が好きだ。私はニツコリして彼に
腕をさしだすだろう。すべてが、
なんて退屈だろう。しかし、なぜ、
こんなに、なつかしいのだろう。

底本：「坂口安吾全集 05」筑

摩書房

1998（平成10）年6

月20日初版第1刷発行

底本の親本：「愛と美」朝日新聞

社

1947（昭和25）年1

0月5日発行

初出：「愛と美」朝日新聞社

1947（昭和25）年1

0月5日発行

入力：tatsuki

校正：oterudon

2007年7月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネット

の図書館、青空文庫（[http:](http://www.aozora.gr.jp/)

[/ / www.aozora.gr.](http://www.aozora.gr.jp/)

[jp /](http://www.aozora.gr.jp/)）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボラ

インハウスの鍵をさす。